
NARUTO～真田紅虎伝～

糸杉 左京

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NARUTO〜真田紅虎伝〜

【Nコード】

N7737Q

【作者名】

糸杉 左京

【あらすじ】

真田十勇士を率い、大阪・夏の陣にて徳川家康まで後一步と迫ったが、命尽き果てた真田幸村がうずまきナルトとして転生した。先に九尾として転生していた猿飛佐助を筆頭として、NARUTO世界にて再び真田十勇士結成を決意する。
甲斐の虎若子が木の葉の虎と呼ばれるまでの物語。

第一話：真田幸村の死（前書き）

初投稿になります。

誤字脱字等ございましたらご指摘よろしくお願いいたします。

第一話：真田幸村の死

（あれからどれだけの時が経ったのだろう）

九尾と呼ばれる妖狐は思いに耽る。

遙か遙か遠い記憶、膨大な年月に霞む先に、赤い赤い人影があった。それを思う度、言いようのない慕わしさと喪失感が獣の心を苛む。それは取り戻したいという衝動に繋がり、この身を縛る小娘への憎悪が募る。

（ワレは：俺は、俺様はこんなところではかかずらってる暇なんかないってのに：）

かつてなく苛立つこの気持ち、野性の勘がその近さを告げているのかもしれないが、もう少し、もう少しで獣を縛る封印が緩む時がやって来る。

そうしたら今度こそこの縛りを引き散切って、捜しに行くのだ。

（必ず、見付け出す）

NARUTO～真田紅虎伝～ 第一話：真田幸村の死

大阪、夏の陣：甲斐武田を率い、西軍の総大将石田三成と手を組んだ信州真田家当主、真田源二郎幸村は此処を最期の決戦と東軍総大将徳川家康の本陣を目指して、真田が誇る忍隊、その幹部衆：真田十勇士を共に戦場を駆け回った。

「遠からん者は音に聞け！近からん者は目にも見よ！我こそは天！

覇！絶槍！真田源二郎幸村なり！命惜しくば道を開けい！立ちほだかるなら斬って捨てようぞ！」

鮮やかな真紅の双槍と具足を纏い、血と炎を撒き散らしながら屍の道を敷いて行く。

金泥で不借身命を謳う六文銭を負うその背を守る影は、橙の髪と迷彩の衣を纏う忍びだ。

見目はちつとも忍べていないが、その気配の薄さは目を離せば直ぐさま見失うほど、成る程確かに忍びの者の中でも頭一つ出た実力者であることが解る。

「そうだ、あんたはそれでいい…大将…いや、真田の旦那。あんたの背中俺様を守る…！」

首周りを覆う衣の影で、ぽつりと呟く決意のままに大手裏剣を振るう。

もはや西軍の命運は決した。

つい先程石田も大谷もそれぞれ徳川主従に破れ、長曾我部と毛利は伊達と雑賀に抑えられている。

だが彼等の主は止まらない。

否、止まらない。

戦を駆ける虎の若子、血河屍山を築く紅蓮の鬼…様々に呼ばれる主だが、共通するのはただ一つ。

武田のため真田のため、滅私で戦い続けた彼は戦しか知らぬ。

東軍には本多忠勝と縁続きになった兄がいる、真田の家は生き残るのだから、戦場にしか咲けない徒花はもはや後顧の憂いもない。

叶うことなら好敵手と呼び合う伊達政宗との決着を着けさせてやりたかったが、この動き続ける戦況の中では無理な話だろう、とこの最期の攻撃の直前、主は苦い笑みを浮かべていた。

『のう、佐助。俺はこの戦で死ぬる。今だから言うが、俺は勝負は好きだが戦は好かんかったのだ』

『うん、知ってたよ』

『だが俺は戦場にしか生きられん。業の深いことだ：鬼と呼ばれても仕様のないこと。なればこそ俺は、この戦国の時代の最後の鬼となろう。もう二度と、戦を起こす気など起きぬように、人々に戦場の恐怖を刻み付ける。いずれ天下人となる徳川殿の最後の甘さ、弱さ：全て俺が持って逝く』

『…』

『それが、お館様からいただいた虎の魂を俺なりに次代に繋ぐことだと思ふ。お前達には悪いが、俺と共に死んで貰うぞ』

『もちろん。我ら真田十勇士、幸村様の刃として死ぬが本望ですから』

彼の優しさを無駄にしないためにも、忍び達は斬って斬って斬り続ける。

（海野）

穏やかな笑みと鋭い観察眼の忍隊の相談役が。

（望月）

突拍子もない発想とあくなき絡繰への情熱を持った忍隊の武器庫が。

（笥）

銃や弓、投擲武器なら百発百中の忍隊の歩く砲台が。

（根津）

山国の信州真田において、海運に精通した忍隊の水の要が。

（由里鎌）

刃物をこよなく愛し、幸村の槍も任される忍隊の研ぎ師が。

（伊三）

信玄と張る酒豪で薬や毒、金創術にも精通する忍隊の医者が。

（青海）

伊三とは逆に下戸で怪力を誇る忍隊の一人破城槌が。

（小助）

幸村の影武者を勤め、主と同じく剛槍の使い手でもある忍隊の変化の達人が。

（才蔵）

氷の面を崩せるのは幸村のみながら佐助に次ぐ実力を持つ忍隊の副長が。

櫛の歯が欠けるように一人、また一人と倒れて行く。

だがその後ろには百を超える道連れがあり、十勇士が欠ける度東軍は百単位で薙ぎ倒される。

（まっこと得難き部下達よ。天晴れ、天晴れ、真田十勇士！）

大谷との戦いから整備無しで立ちはだかった本多忠勝を機能停止に追い込み、幸村は本陣へ駆ける。

石田が引き裂いたのだろう、葵紋の幕の向こうに、東軍総大将がいた。

「徳川、家康ううううっ！」

「！？真田！？」

黄色の頭巾も土まみれ、石田が付けたと思しき大小様々な切り傷だらけ、満身創痍の徳川家康が、そこにいた。

こちらも疲労は頂点に達し、気力だけで動いているに近い。

「西軍武田が大将真田源二郎幸村！徳川家康殿！いざ尋常に勝負！」

佐助を引き連れ槍を構えた瞬間であった。

風を切る駆動音に振り向けば、ばらばらと鎧の破片を撒き散らしながら停止したはずの本多忠勝が突き込んでくる。

その余りの速さにそれを認識した瞬間には既に避けようもない距離で、身を呈して庇おうとしてくれる佐助を咄嗟に引き倒していた。

目の前を本多忠勝の巨体が通り過ぎる。

一瞬遅れて耳を打つ骨の碎ける音に背筋が冷え切った。

「だっ…旦那アアアアアアアッ!!」

岩壁にめり込んだ本多忠勝はびくりとも動かない。

「忠勝っ!!」

徳川家康が何事か叫んでいるが、佐助の意識にはかすりもしない。

「何でっ…何で俺を盾にしなかった!? 旦那あっ!!」

掘り起こそうと近付くが、突如岩の隙間から炎が噴き出て岩を弾き飛ばした。

思わず顔を庇うが、その後から現れた姿に息を呑む。

「紅蓮の…鬼…」

誰かの眩きが響く。

視界の端に掛かった影は青かったような気がするが、佐助は主から目を離すことは出来なかった。

本多忠勝の螺旋槍を受け止めたらしい左上半身はえぐり取られ、散切れかけた六文銭が辛うじて首に引っ掛かっている有様だ。

そのような死に体で一步、また一步と徳川家康を目指す姿は幽鬼じみて、誰もが縫い止められたように動けない。

後一步で槍が届く、というところで、遂に幸村は崩れ落ちた。

「真、田…?」

彼の死を確かめようというのか、徳川家康が手を伸ばす姿を見て…

キレた。

「旦那にっ：触れるなああああっ!!」

それからは無我夢中で、佐助はどうやって幸村を抱えたまま戦場を離脱したのかよく覚えていない。

ただ気が付けば上田に程近い、よく主が鍛練だったので訪れていた山に辿り着いていた。

足がうまく動かない。

背中も何箇所か痛みを通り越して熱い。

遂に足が縛れて転倒する。

「はあ：旦那、旦那：上田だよ。帰ってきたよ」

掠れた息は言葉にもなっていないが、もう聞こえていないのだから構わないだろう。

（嗚呼：眠いなあ：）

季節は夏だというのにいつも熱があるのかと思うほど体温の高かった主は冷たくて、でも自分もさして変わらなくなり始めている。

顔を覗き込めば鬼の形相を予想したのに、見開かれたままの眼は透き通って、血に塗れた口角は緩く笑みを浮かべていた。

その達成感に満ちた何処か穏やかな顔に、誰に向かっているかも解らない嫉妬が胸にちくりと針を刺す。

「何で：連れて逝ってくれなかったのさ：？」

ああ、意識が薄れ行く。

第一話：真田幸村の死（後書き）

少しグロかったでしょうか？

一応腐要素は入れていないつもりですが、そう見えたらすみません。
御視聴ありがとうございます。

今後ともよろしくお願いいたします。

第二話…輪廻の縁

（此処は…何処だ？）

ぼつりと疑問が沸き上がる。

（俺は…誰だ？）

またぼつり。

眼を開ける。

開ける眼があることを認識する。

息をする鼻と口がある。

ざわざわと梢の囁きのような音を聞く耳がある。

首を、肩を、腕を、胸を、腹を、腰を、脚を認識する。

（嗚呼…俺は、俺だ。真田源二郎幸村だ）

着慣れた赤備えの具足が、真白の空間に慣れた視界に少し痛い。

（死後の世界、なのだろうか？）

だが花畑も三途の川も閻魔の御殿もありはしない。

自らの影すら白に塗り潰された世界に、唯一人立ち尽くしている。

寝ぼけていたような感覚がはつきりするにつれて、辺りに満ちる殺気に身構える。

その手には当たり前のように真紅の双槍が握られていた。

白の世界が反転した。

九尾が新たに囚われたその第一印象は、『紅』だった。
天井も壁も床も格子状の檻も、全てが赤い。

床に満ちる水は澄んだ清水で、要所要所に配された金の色が『紅』の薄暗さを払拭し、不思議な神域めいた気配を漂わせている。
だがそれがますます九尾の焦燥を掻き立てた。

魂の半分近くを四代目火影と呼ばれた男に封じられたお陰で、獣の性が抑えられ、かつてなく意識はすっきりと冴え渡っている。

どうすればこの封印の主を殺し、外に出られるか、思案を廻らせていた。

ふ、と、気配を感じて檻の外へ目を向けると、近付いてくるその気配は驚いたことにこの封印の主のものであった。

（何故だ？封じられたのは赤ん坊ではなかったか？）

赤ん坊という生き物は自我など確立されていないものだ。

無意識が意識の先にあるこの領域に辿り着けるはずはなし、ならばこの封印の主は何者なのか。

（否、むしろ都合か）

自我があるならば舌先三寸でだまぐらかし、封印を解かせることも可能かもしれない。

希望を見出だした九尾は警戒は怠らず、気配が近づくにつれ点っていく金の燈籠の照らす先を見た。

『紅』

それはこの赤の空間においてなお赤い、青年のいで立ちをしていた。
赤い胴衣の前は全開で、やはり赤い鉢巻きと襟足だけ長く伸ばした茶髪が駆ける後を追う。

朱塗りの双槍を軽々と掴んだまま、青年は檻の前で立ち止まった。

「そなたか？某に殺氣を向けておったのは」

やたらとでかい声に、暗がりの奥で九尾は耳を伏せた。

「何故殺氣を向けてきたかは知らぬが、早々に立ち去る故、此処が

何処か教えてはいただけぬだろうか」

こいつは何を言っているのだろうか。

「ああ、名も知らぬでは警戒せざるを得まいな」

何故こんなにも胸が熱くなるのか。

「某は、真田源二郎幸村と申す」

暗転した先に、赤い鳥居があった。

それを潜ればまた鳥居、幾つも潜るといつの間にか浸水した建物の中に入っていた。

何の仕掛けか、高い天井に掛けられた金燈籠が進む先々で点っていく。

首裏を走る殺気が強くなる。

だが初めての他者の気配に幸村は怯む事なく近付いて、やがて辿り着いたのは、巨大な赤い格子の檻だった。

その暗がりの奥に、巨大な何かが潜んでいる。

声を掛けるも反応は薄く、警戒しているのやもと名乗りを上げると。

『真田、幸村…？』

太くしゃがれた声が遂に答えた。

その巨大な何かが蠢き、格子に近付いてくる。

「狐か？それにしてもでかいな…」

頭だけで幸村の背丈ほどはあるだろうか、とてつもなく巨大な狐と思しき獣は、幸村をじろじろと舐めるように見た。

『旦那、だ…』

「む？」

その声は喉に詰まったらしく聞き取れなかった。

獣の気配が変わっていく。

一つその巨体を身震いすると、白い靄のようなものが溢れて、それ

が消えると獣の代わりに見知った気配と姿をした男が立っていた。

「真田の旦那！」

「さ、佐助！？」

その夕焼けのような橙の髪も、迷彩模様の忍び装束も、何より馴染んだ気配が猿飛佐助であると訴えていた。

それから様々な話をした。

この世界の事、佐助の事、昔の事、今の事、多くを語り合った。

佐助は九尾の尾獣と呼ばれる狐に、幸村はそれを封印する器の子供に生まれ変わったと聞いた。

此処から出られないという佐助に、幸村は封印を解くかと問うた。

佐助は要らぬと答えた。

誰よりも近い此処から、幸村を守ると。

新しい生ならば、もう自分に縛られることはないと言幸村は説いた。
新しい生なればこそ、自分の意志で守りたいと言佐助は訴えた。

「全く、強情な奴だ」

「今度こそ、ちゃんと最期まで連れてってよね」

第二話：輪廻の縁（後書き）

次から幼少期編が始まります。
御視聴ありがとうございます。

第三話…オカンと公園デビュー

三代目火影、猿飛ヒルゼンと呼ばれる老人は、ようやく一段落着いた九尾騒動の雑務に凝り固まった肩をほぐしながら、すっかり日の落ちた廊下を歩いていた。

三月経ち、新年を迎えたがいまだ電気の復旧もままならず、角々に立てられた蠟燭が唯一の明かりだ。

ふと行く先を見ると、蠟燭の明かりにちらりと影が射す。

そちらは身内のみの母屋の方角で、ヒルゼンは眉をしかめて苦無を手にとった。

暗がりを伝うように影を追うが、その影はヒルゼンを誘導するようにちらちらと現れては消えることを繰り返す。

そして最後に、四代目の遺児を預けた部屋へと影は消えた。

警戒を怠らぬまま戸だけを開ける。

何もない。

「入ってきなよ、三代目火影サン？攻撃する気は無いからさ」

近頃声を出すようになったナルトのリラックスした笑い声がする辺り、本当にその意思は無いのだろう。

赤ん坊とは敏感な生き物だ。

一応すぐ取り出せる位置に苦無を戻し、ヒルゼンは部屋の中へと入った。

そこにいたのは、夕焼けのような橙の髪と迷彩模様の忍び装束を身に付けた若い男だった。

正座した膝の上に金の産毛が生え始めたナルトを抱えている。

そこまではまあ良いでしょう。

ただ男の頭から金色の三角耳が、背後に蠢く複数本の尻尾が生えてさえいなければ。

それは否応なく九尾の狐を連想させ、ヒルゼンは顔をしかめた。

「お主、何者じゃ？」

二人の前に座って問い掛けると、尻尾でナルトをあやしていた男がようやくヒルゼンを見た。

「俺様は、人呼んで猿飛佐助。あんた方には九尾の意識そのものと名乗った方が解りやすいかもね」

「！」

一瞬だけ漏れ出たチャクラは忘れようもないあの九尾のもので、咄嗟に苦無を手にしていた。

「おっと、その物騒なものは仕舞っておくれよ。まかり間違って旦那に刺さっちゃったら危ないじゃない」

ねー旦那、とナルトに笑いかける笑顔は本当に心からのもので、ヒルゼンは毒気を抜かれた気分で座りなおした。

「何が目的じゃ？」

「俺様の目的は二つ。一つは謝罪さ」

「謝罪じゃと？」

ヒルゼンは奇妙な心地に襲われていた。

あの暴虐のかぎりを尽くした九尾とナルトを挟んで普通に会話しているのだから。

「うん、大昔はともかく、俺様が封印から逃れたかったのは、旦那に会いたかったからなんだ。旦那が産まれると解っていたら、あんなに暴れる必要はなかった。だから、その点に関しては心からお詫び申し上げる」

そう語ると、九尾の男はナルトを丸めた尻尾の上に避けて、見事な土下座を決めて見せた。

この男がナルトを心から慕っている事と、反省している事だけは確かに伝わった。

「：許す、とは言えんが、その気持ちだけは受け取ろう」

「ありがとうございます」

「話の続きをしてもらえるかの」

ようやく頭を上げた男は、うとうとし始めたナルトを抱え直して語り始めた。

「二つ目の目的は、援助の要請です。おそらく旦那はこれから俺様の所業のとばっちりを受けることになる。俺様はそれから旦那を守りたい。そのために、俺様が此処にいるってことを承認してもらいたいんです」

「つまり：この里の人間になりたいと言うのじゃな？」

「そうなりますね。今の俺様は言うなれば影分身みたいなもんですが」

しばし視線での探り合いが続いた。

「お主とナルトの関係を聞かせて貰おうか？」

「主従です。旦那が主で俺様が従者。何故今現在こんな形になったかは聞かなくてくれると助かりますね。そこまでは解らないんで。

ただ一つ言えるのは、俺様が旦那を裏切ることはないし、旦那も俺様を見捨ててはくれないだろうって事だけです」

すっかり寝入ってしまったナルトを寢床に戻し、母親の如く優しい慈愛の笑みでそれを眺める男に、ヒルゼンは羨望の感に堪えなかった。

今や忍者とは金で貸し出される生きた兵器でしかなく、それを扱う大名達は利権争いに精を出すばかりだ。

だがこの男は、心から仕えるべき主としてナルトを見出だしたのだろう。

魂さえ掛けるに値する主に出会えた男が、少しばかり羨ましかった。

「…良からう。お主を木の葉の民と認めよう。お主は忍務はナルトとこの里を守ることの二つじゃ。里人がナルトを害しそうならば、それすらも回避してみせよ」

「承りました。蒼天疾駆猿飛佐助、忍び参る」

佐助と幸村改めうずまきナルトが木の葉の里に居着いて二年の月日が経過した。

これまではほとんど火影邸に閉じこもっていたが、段差も登れるようになって行動範囲も広がったナルトのため、今日は公園デビューが予定されていた。

「さって、旦那？忘れ物はない？」

「ん！てぬぐいもちりがみもおやかたさまにいれたぞ！」

「それじゃ、行きますか」

「うむ！いざしゅつじんだ！」

訪れた木の葉児童公園では、既に何組かの親子連れが楽しそうに遊んでいた。

かつての生では小さくとも一国一城の主の子として、あまり同年代の子供と遊ぶ機会のなかった幸村もといナルトは、期待と興奮でその青い目を輝かせていた。

やはり精神が肉体に引きずられているのか、ナルトはこの年齢にしては大人びているが幸村の年齢としては子供じみている。

…もともと子供っぽかったとは言わぬが華だ。

「さ、旦那も行っておいで」

「いつてくる！」

駆け出すお館様リュックを背負った背中を見送って空いたベンチに腰掛けると、近付いてくる人影があった。

「上月さんじゃないですか」

「あ、山中さんおとついぶりで」

それは最近鼯鼠にしている花屋の店主、山中いのいちだった。毒草から薬草まで幅広く取り扱う彼の店は佐助をして唸らせるほどの品揃えで、ナルトの毒慣らしを始めるに当たってかなり重宝していた。

上月、というのは猿飛のままでは面倒なことに成り兼ねないということに着けられた仮名だ。

「上月さん結婚してらしたんですか？」

「まっさかあ。あの子は火影様からお預かりしてるだけですよ」

そう笑顔で返すと山中は営業用の微笑みを消し、厳しい顔で佐助を見た。

「貴方は、あの子が誰なのか知っているんですか？」

佐助は緩やかな笑顔は崩さぬまま、眼だけで探るように山中を見つめ返した。

「あの子は私たちの友人の忘れ形見です。もし貴方があの子を害す」
「皆まで言わずとも結構ですよ。俺様があの方を：ナルト様を裏切ることは有り得ませんから」

山中の言葉を途中で遮り、佐助は周囲に鋭い視線を向けた。

「だから皆さん武器を下ろして貰えませんか？旦那が心配してこっち見てるんでね」

あの常在戦場とも言える生き方を貫いたナルトの中の幸村が、自身に向いていないとは言えこんな至近距離で発された殺気に気付かない訳がない。

子供達の群れの中から、じっと佐助と山中の座るベンチ周辺を見ていた。

それに安心させるように笑顔でひらひら手を振って、佐助は新たに現れた二人の男に眼を向ける。

黒髪を引っ詰めた顔に傷のある男とボサボサと長い茶髪の大柄な男は、困ったように山中と眼を見合わせた。

「やれやれ、これは火影の大将の指示ですかね？」

二年も経てば多少は信用されてると思ったんだけどなあ、と愚痴る佐助に、山中は即座に否定の言葉を紡いだ。

「いや、今回のことは私たちの独断だ。私たちが、君に対する安心が欲しかったのだ。気を悪くさせるようなことをしてすまなかった」深々と頭を下げる山中達に佐助は苦笑して頭を上げるように言った。「まあ、気持ちは解りますから。そちらのお二方を紹介してもらえますか？ 旦那の味方になってくださる方達なら仲良くさせてもらいたいですし」

そう言うと、三人は顔を見合わせ、はにかんだような笑みを浮かべて名乗った。

「まったく敵いませんね。改めまして、諜報部隊所属上忍山中いのいちです」

「上忍奈良シカク。火影補佐隊の一人だ」

「秋道チョウザ。戦忍部隊所属の上忍だ」

「特別上忍上月佐助。本当の名前は猿飛佐助。ナルトの旦那の一の部下です。どうぞよろしく」

第三話：オカンと公園デビュー（後書き）

保護者会の巻。

次は子供会です。

御視聴ありがとうございました。

第四話…子供達

「それがしもまぜてください！」

佐助に促されたナルトは、早速手近にいた子供達の群れに突撃していた。

「だれだー？」

子犬を連れたフードの男の子が問い掛ける。

傍らのナルト等と変わらない歳だろうに何故かサングラスを掛けた男の子も、不思議そうに首を傾げていた。

「それがし、うずまきナルトともうす！それがしとおともだちになつてください！」

ナルトは、友達、という存在に憧れを抱いていた。

過去世ではそうそう自由に遊ぶ時間などなかったし、一番歳が近いのは年子の兄くらい、その次が影武者でもあった小助で、それも十を過ぎてから会ったため部下の感覚が強い。

十勇士は家族ではあるが、結局皆も佐助も部下…身内であることは変わらない。

友達、という定義に一番近かったのはおそらく奥州筆頭伊達政宗だろうが、平時は彼の方が立場が上であるし、かと言って戦場では好敵手の色合いが強かった。

城下に一人で出られるようになったのは小助が来てからで、その年頃の男はたいいてい働きに出ていてそうそう遊べるものでもない。

せいぜい幼子達の相手をするのが精一杯だった。

だがこれからは本当の友達を作ること出来るだろうと、ナルトは期待にワクワクと瞳を輝かせていた。

「おまえ、へんなやつだな」

「へっ！？へんでござるか！？」

ガガンとショックを隠せないナルトに、子犬を連れた男の子はにやりと笑顔を向けた。

「でもおもしろいぜ。おれはいぬづかキバ！」

「あぶらめシノだ」

名乗ってくれた二人にホッとした笑顔を向けて、ナルトも返す。

「よろしゅうおねがいしまする！キバどの、シノどの！」

NARUTO／＼真田紅虎伝／＼ 第四話…子供達

新たにナルトを加えてやれ高鬼が隠れん坊か、はたまた鬼ごっこかときゃいきゃい相談するなか、ナルトはふと風に馴染み深い戦場の臭いを感じた。

それはつまるところ殺気というやつで、その出所は佐助の座るベンチ周辺だった。

振り向けば淡金色の髪を馬の尾のように纏めた男が傍らに座り、他にも二名ほど潜んでいるらしい。

気配の消し方から言って十勇士ほどではないし、その位なら三人掛かりでも佐助が負けるとは思えないが、それは周囲の被害を考慮しなければの話だ。

（加勢は要るだろうか？）

そう問い掛けるように見つめれば、にっこりと笑顔で手を振られた。
（大丈夫だよ）

佐助がそういうならそうなのだろう。

「なにみてるの？」

掛けられた声に振り返れば、佐助の隣の男とよく似た金髪の女の子が立っていた。

「とーちゃんたちだ。あれだれだ？」

「おみかんみたいなかみだねえ」

そう言った黒髪と茶髪の男の子達は、それぞれ新たに佐助のそばに現れた男達とよく似ていた。

「あれは佐助でござるよ」

「さすけ？」

「それがしのかぞくでござる」

「ふーん」

胸を張って紹介するも、子供達の興味は薄いようだ。

その様子に苦笑して、ナルトはまず自分の名を名乗ることにした。

「それがしはうずまきナルトともうす」

「あたしやまなかいの」

「ならシカマル」

「あきみちチョウジだよ」

「なかようしてください」

お互いに名乗り合って、ぺこりと頭を下げると金髪の女の子は大きな緑色の眼をくりりと回した。

「へんなしゃべりかたね」

「そうでござろうか？」

確かにナルトの言葉遣いは完全な武家言葉ではある。

「おーい！だるまさんがころんだやろーぜー！」

そこに掛かったのはキバの声だった。

「やるやる！」

いのはぱっと身を翻すとキバとシノのいる方へ駆け出していく。

ナルトも残る二人の手を引いて、そちらへ行くことにした。

「シカマルどの、チョウジどのもまいりましょうぞ！」

「うお!？」

「ま、まってよー」

変わった子との認識が広まってしまったが、ナルトの公園デビューはまずまずうまくいったと言えるだろう。

公園からの帰り道、佐助とナルトはなかなか盛況している甘味処に立ち寄った。

かつての調子で頼みかけたのを何とか宥めすかし、みたらしとあんこと三色団子を三本ずつにおさめて注文して席に着く。

と、そこに店員が近寄ってきた。

「申し訳ありませんが、相席お願いしてもよろしいでしょうか？」

「あ、はい。構いません」

「ありがとうございます」

「すみません、お邪魔しますね」

そう言っただけで同じテーブルに着いたのは青みがかった黒髪の十二かそこらの少女だった。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「取り合えずお汁粉とみたらしと三色とあんこ十本ずつ」

さらりと宣われた余りにも大量の注文に、佐助は危うくお冷やを吹くところだった。

「だんごがおすきでござるか？」

ナルトは軽く咳込む佐助を無視してにこにこ少女に話し掛けている。

「そうよ。坊やも好き？」

「だいすきでござる。あまいはしあわせでござるよ」

「解ってるじゃない。私はみたらしアンコ。坊やのお名前は？」

「うずまきナルトともうす」

その瞬間、店内の空気が凍り付いた。

空気の変化を感じ取ったのか、少女はびくりと肩を揺らす。

ナルトは一瞬だけ哀しそうな笑みを浮かべて、あえて気付かずげにこやかに話し掛け続けた。

佐助も表面上は笑みを崩さず、周囲に気を配っている。

段々と店内は元の喧噪を取り戻したが、いまだ鋭い眼でナルトを見つめる者は消えない。

それでも笑う健気な様子に、少女は肩に張っていた力を抜いた。

「坊やはどんなお団子が好き？」

「なんでもすきでござるが、いちばんはさすけのだんごでござる」

「さすけ？ってこのお兄さん？」

「いかにも。さすけがつくってくれただんごがそれがしにとっていちばんおいしいでござる」

きゃーっ、と恥ずかしそうに頬っぺたを押さえる仕種をするナルトは、ごく普通に可愛らしかった。

（なんで旦那は…っ。やっぱりうちの子が一番可愛い！）

もはや佐助の思考はオカンそのものだった。

心の中でニヤニヤしていると、店員が注文した品を持ってきた。

少女は早速ぱくつき始めるが、ナルトは昔からの言い付け通り大人しく待っている。

それによしよしと頭を撫でて、佐助はそれぞれの団子を一個ずつかじった。

佐助の鋭敏な舌が微かな苦みを察知する。

（みたらしに下剤とあんこに痺れ薬：成人量だから普通の幼児なら致死量だけど、慣らしてあるし先に解毒剤飲ませとけば大丈夫か）
そう判断して飲み込むと懷から幼児の細い喉でも飲めるよう小さく作った丸薬を取り出し、ナルトに向けた。

「旦那、あーんして」

「あー」

「はい、飲んだら食べて良いよ」

「ん！」

ごくりとお冷やで丸薬を飲み下し、ナルトは嬉しそうに団子に食いつく。

その無邪気な様子はかつての幸村によく似ていたが、こんなにも幼

い頃から毒味が必要なナルトが憐れにも思える。

しかも向けられる悪意は本来なら九尾の妖狐である佐助が受けるべきものなのだ。

覚悟していたとは言え、現実には胸に重くのしかかる。

人としての理性を取り戻した今、獣として本能のままに振る舞う訳にも行かないことが酷くもどかしい。

どうしようもないこの気持ちをナルトの頭を撫でることでごまかす。その思いと周囲の悪意に対する警戒ばかりで、何かを決意したらしい少女の眼差しに気付くことはなかった。

第四話：子供達（後書き）

次は番外編にしようかと思えます。
御視聴ありがとうございました。

番外編その1…猿飛佐助忍法帖〜立たなかったフラグ〜

九尾事件から一年と半年が経った暖かい春の宵…ようやくインフラが整い始めた木の葉の里に、ぬるい風が吹き抜けた。

火影邸の庭先に、黒く染め直した髪を揺らし、六枚の古銭…この世界には有り得ない真田の家紋を裏に縫い付けた木の葉の鉢金を着けた迷彩の忍び装束の男が立っている。

草化粧を施した顔を酷薄な笑みに歪め、男は小声で呟く。

「さあて…ナルトの旦那もおねんねしたし、お仕事お仕事っ」と

振り返った先の室内には鮮やかな橙色の髪の彼とそっくりな男がこちらを見ており、お互いに視線を交わし頷き合う。

その奥には男の何より大切な主である子供が眠っている。

少しだけ笑みを緩めて、男はその細身をたわめる。

「真田忍隊長、猿飛佐助忍び参る…！」

弾かれた矢のように男の身体は宙を駆けた。

NARUTO〜真田紅虎伝〜 番外編その1…猿飛佐助忍法帖〜立たなかったフラグ〜

うずまきナルトとして転生した真田幸村に再会するまで九尾の妖狐として生きてきた佐助は、正直言って人間としての常識だの道德観だのが記憶の遥か彼方にすっ飛んでいた。

三代目火影、猿飛ヒルゼンと面会するのに三ヶ月の間が空いたのは

そのためだった。

深層意識の封印の中で幸村と会話してちぐはぐになることもざらで、常識はともかく頑固なまでにきっちりした道徳観を持った幸村が、付きつきりで昔語りに付き合ってくれたお陰で何とか人としての支柱を立て直せたのだ。

幸村が深層意識にすることで幼過ぎるナルトの脳に負担を掛けずに済んだのは思わぬ結果だったが。

さらに言えば気配を消す腕が上がったとか、感覚器の発達とか上昇した部分もあるが、知識面や技術面でかなり記憶のあやふやな部分が多いことも判明した。

気合いで思い出した婆娑羅甲賀流影分身の術でヒルゼンと面会した佐助は、頼み込んで里の図書館に影分身の一体を常駐させる許可をもぎ取った。

九尾の妖狐としての知識と、この世界の忍びの知識、かつての甲賀流免許皆伝の知識をすり合わせる作業はなかなか難しかったが、九尾の無尽蔵に近いチャクラがあるため実践には事欠かなかった。

こうなってみて改めて、尾獣というのは本当に反則に近いと思う。

尾獣になった経緯はよく覚えていないが。

物心と言ふべきか、そんなものが出来た頃には既にこのような存在だったし、赤の色に心捕われるようになり最初の人柱力に封じられ…様々な忍び達と関わってきたが、人より獣の性の方が強くて興味もなかった。

もっと知っておけば良かったと思って後祭りだ。

本体はナルトの中、ナルトの世話役の影分身と知識探究役の影分身に分け、ナルトが離乳食を始めた最近になってようやくある程度の形を見たのだった。

こっそり禁術も納められている火影邸の禁書書架にも忍び込んで、木の葉流影分身の術も習得したお陰で人手も増えた。

この世界というのは実に忍術のレパートリーが豊富で、習得するのがちよつと楽しくなったのは内緒だ。

今宵は復興のどさくさに紛れて特別上忍として登録された『上月佐助』の初任務なのだ。

任務内容は明日同盟締結のために訪れる雲隠れの里の忍び達の監視及び里の警備…の、補助だ。

さすがにいきなり重要な役職を与えられる訳も無し、取り合えず影分身で里の中を巡回することになっている。

特に血継限界と呼ばれる特殊能力を持つ日向とうちは一族の住む地区を重点的に警備してほしいと言われているが、影分身が使えるからと人海戦術で良いように使われていないだろうか、と佐助は思う。

（まあ：旦那のためならえんやこらってね。取り合えず他所の人間に警戒しなきゃいけないのは何処も同じってか）

「はいはい、検問だよ。ごめんね」

日向もうちもそれぞれの居住区内に商店街を構えているため、身内だけで生活が成り立つといっても過言ではないのだ。

故にやることは地区の出入りを検問すること位で、今の所佐助の感性に引っ掛かるような不審人物はいない。

何箇所かで遠目に見てくる雲隠れの忍びらしき気配はあったが、突入してくる気配は無いので放置した。

結局同盟は無事締結され、これで一つの悲劇が回避されたことを佐助は知らない。

番外編その1：猿飛佐助忍法帖く立たなかったフラグく（後書き）

立つ立地すら潰す。

忍びってのは何でもあり、が免罪符です。

御視聴ありがとうございました。

第五話…アカデミー

「ねえ旦那、やっぱり考え直さない？」

珍しく渋面で、のろのろと世話を焼いてくる佐助に、ナルトはぱちくりと眼を瞬かせた。

「何を言うか。もう入学式当日だぞ？今更やめられるか」

そう言って真っ白なシャツを着たナルトは慣れた手つきでまた襟足だけ伸ばしはじめた金髪をゴムで縛った。

まだ性差が出ないだけに黙っていれば少女のように見えなくもない。ナルトと佐助は現在、火影邸を離れて里外れの一軒家で暮らしている。

佐助が持てる技術の粋を結集して整備した見た目立派な日本家屋、その実中身は立派な忍者屋敷で、二人暮しには少々、いや大分大きい。影分身が使える以上維持に問題はない。

以前任務で警備隊に影分身を貸したところやはり良いように頭数の当てにされてしまい、日に三人ずつ、すっかりローテーションに組み込まれて仕舞ったのだ。

（あは、超過勤務は慣れてるさ…はあ）と内心ため息を吐いたのは秘密だ。

「だって！」

ハンカチちり紙筆記用具に茶を入れた水筒を相変わらずのお館様…赤いモヘア生地に着と黒いつぶらなボタンの眼、チョビ髭を着けた佐助謹製のリュックサック（二代目）に詰め込みながら、佐助は負の感極まったように叫んだ。

「旦那は立派な武将なのに！なのに…旦那が忍びになるなんて！」
佐助がこう叫ぶのも無理はないと言える。

忍びとは本来、耐えがたきを耐え忍びがたきを忍んでどんな手段を使ってでも目的を達する、影に生きる者なのだ。

いくらこの世界では忍びの存在が一般的で場合によっては誉れ高い

生業であろうとも、かつては勇猛な武将であり一城の主であった姿を知っている佐助には許せないらしい。

だが『うずまきナルト』は忍びにならなければならなかった。

九尾の妖狐のみならず全ての人柱力はそれ自体が勢力図の大勢を決めかねない重要な存在だ。

当然命を狙われることになるだろうし、その相手はほぼ確実に忍びだろう。

忍びに対抗するには忍びしかない。

佐助とて重々承知の上だし、今の佐助はままならない現状に拗ねているだけだ。

それが解るだけにぷりぷり怒る佐助にナルトは苦笑するしかなかった。

「そう拗ねるな、佐助。俺は嬉しいぞ？お前『達』と同じになれるのだからな」

そう嘯いてやれば、佐助は困ったようにナルトの頭を撫でてリュックを背負わせた。

「ホントに旦那は…忍び殺しなんだから」

今日はアカデミーの入学式だった。

NARUTO（真田紅虎伝） 第五話…アカデミー

入学式は滞りなく進んだ。

新入生の名が呼ばれる段階で、ナルトの名に保護者席の空気が一瞬揺らいだ以外は。

その後は講堂形式の教室へ移動し、席順と教員の指示にしたがって座る。

子供達を席に着かせた教員は、静肅を求めた後改めて挨拶を始めた。
「おはようございます。俺が君達を指導する担任のうみのイルカだ。これから六年間よろしく頼む」

「「「よろしくお願いしまーす」」「」」

黒髪を頭頂部に結い上げた真一文字の傷痕が白く浮かび上がる男性教諭は、元気の良い返事につこりと笑顔を見せた。

「まずは皆で自己紹介をしよう。出席番号順に呼ぶから、名前、趣味、特技、好きなもの、将来の夢なんかも良いな。順番に話していきってくれ」

順番に読み上げられる名前ごとに、立ち上がって自己紹介していく子供達：チョウジやシノ、キバといったお馴染みの面々がクラスメイトらしい。

その幸運に感謝しつつも、50音順だとすぐにナルトの順番になる。

「次、うずまきナルト！」

「はい！某、名はうずまきナルトと申します。趣味は鍛練、特技は乗馬、好きなものは佐助の団子、将来の夢は両親とお館様に恥じぬ漢になることにごさる！」

そう自己紹介すると、隣に座っていた黒髪の美少年がびっくりしたようにナルトを見てその大きな眼を瞬かせた。

「次、うちはサスケ！」

少年は少々困惑を残したまま立ち上がる。

「えっと…：うちはサスケだ。趣味は鍛練、特技は火遁、好きなものはトマト、将来の夢は兄さんのような忍者になることだ」

その自己紹介にナルトも大きく眼を見開いた。

サスケ少年が座って次の子供が立ち上がるのを見計らって、ナルトは小声で話し掛けた。

「そなたもサスケと申すのだな」

ナルトの小声にサスケも小声で返す。

「うん、まあな。そっちは？」

「こちらの佐助は某の家族でござる。木の葉では上月佐助と名乗ってござる」

「へえ…」

ひそひそ、くすくす。

子供達の話し声はひそやかに響く。

「これも何かの縁。どうぞ仲良うしてください」

「うん。よろしくな」

「うちは殿！」

サスケが呼ぶ声に振り返ると、今日出会ったばかりの金髪の少年が駆け寄って来ていた。

「うずまきナルト：で良かったっけ？」

そう問い掛けると、ナルト少年は嬉しそうに青い眼を細めた。

「はい！覚えていただけて嬉しゅうござる」

「何か用か？」

話しながら横に並んで校門へ向かう。

「うちは殿の家はうちは地区でござろう？某の家もそちらの方面なのでご一緒できればと」

如何でござろう、と問い掛けてくるナルトは仲良くなりたいという気持ちに溢れているのが解って、佐助は嬉しくなった。

でもそれを素直に表現するのは何だか気恥ずかしくて、つつい素っ気ない態度を取ってしまう。

「良いぜ」

そんな態度にも気にした風もなく、ナルトはにこにここと笑っている。サスケは少々人見知りの質だったので、実はうちは一族以外では親しい友はいなかった。

初めての身内以外の友達の予感に人知れず緊張していた。

と、そこに四、五人の子供達が声を掛けた。

「ナルト！また明日な〜！」

「バイバイ！」

ナルトもそれに手を振って返す。

「キバ殿、シノ殿、シカマル殿、チョウジ殿、いの殿も！お気を付けて帰られよ！」

実に馴染んだ様子で彼らを見送るナルトに、何だか面白くない心地がする。

「…」

「さ、うちは殿。参りましょうぞ」

振り向いて微笑むナルトに、それが他人行儀な苗字呼びにあるとサスケは考えた。

サスケは意を決してナルトに話し掛けた。

「なあ…」

「はい？」

「うちははいっぱいいいるからさ、名前で呼んでよ。僕もナルトって呼ぶから」

そう言うと、ナルトは一瞬虚を突かれたような顔をして、嬉しそうに笑った。

「はい！よろしゅうお願いいたす！サスケ殿！」

第五話：アカデミー（後書き）

少しサスケらしくないかも知れませんが、サスケだって最初からあんな性格じゃなかっただろうし。

やっぱり子供の性格形成って環境によりますから。

御視聴ありがとうございました。

第六話：うちは事変・前編（前書き）

先日の東北地方太平洋沖地震の被災者の皆様のご冥福と、一日も早い復興をお祈りします。

第六話…うちは事変・前編

忍術アカデミーに入学して一年も経てば、それなりに評価の方向性が出てくる。

ナルトは座学とチャクラ操作はからきしだが、戦闘訓練とサバイバル演習では敵無しの武闘派野生児と見做されるようになった。

手裏剣や苦無の命中精度はさして高くないが、体術と棒術が凄まじくサスケだろうとキバだろうと相手からの攻撃は全て避けて叩き落とす。

隠れるのも上手いとは言えないが、シノの虫やヒナタの白眼でさえ把握された瞬間に気付くのだ。

血継限界でさえ嗅ぎ分けるその勘の鋭さは、厳しい自然を生き抜く野生動物を思わせた。

交友関係はさほど広くないが根深く、名門うちは一族らしく頭角を表しだした人付き合いの苦手なサスケを唯一クラスの輪に入れることの出来る人間として、担任のイルカにも頼られている。

そんなある日のことである。

いつも通りの放課後、ナルトはサスケと共に手裏剣の居残り練習をしていた。

お互いあーでもないこーでもないと言い合って安定した投擲フォームを探していたが、気付けば既に夕方、二人は慌てて帰路についたのだった。

木の葉の誇る血継限界、日向一族とうちは一族はその親類縁者が密集する専用の居住区に住んでいる。

血継というだけに血の保存が最優先されるからだ。

やろうと思えばその地区内だけで生活できる程に施設や店舗が充実しているのであまり関係者以外は立ち入らないのだが、ナルトはいつもサスケと合流するために大回りにうちは地区を抜けて自宅とアカデミーを往復している。

この日も二人は競走しながら家路を急いでいたのだが、後二軒ほどでうちは地区に入るという頃、ナルトは嗅ぎ慣れた、しかし今生では嗅いだことのないはずの臭いに足を止めた。

サスケは十歩ほど進んでしまってから蹴っ躓きつつ何とか止まり、訝しげな顔で振り向く。

（何故、今この地で？）

ナルトはサスケの家のある方角を睨んだ。

戦場を駆ける武将として、忍隊の主として培った感覚が、二人の周囲に纏わり付くような殺気を感じ取っているのだ。

「ナルト？どうした？」

サスケを巻き込まないよう逃がすには、相手にきっちり把握されすぎている。

「サスケ殿、血の臭いが致しまする」

撤退は無理だと判断し、ナルトは背負っていたお館様リュックを下ろして今の身長に合わせて再び鍛練を始めた短い双槍を取り出した。

「??? 何言ってるんだ？」

このくらいなら口寄せで説明が付くので突っ込みは来ないが、街中で急に物騒な物を取り出すナルトにサスケはかなりどん引いたらしい。

近道の路地裏、ちょうど周囲に誰もいない時間帯で良かった。

「参りますぞ。構えなされ！」

戸惑いを抑え切れない表情で、多少もたつきながらサスケも苦無を取り出した。

それを確認してから、ナルトは再び走り出す。

「…こんなに近付くまで気付かなんだとは…弛んでおるわ。叱って下され、お館様…」

小さく舌打ちしながら口の中で呟きつつうちは地区に入ればやはり、行く先々に赤い血溜まりと人間だったモノが倒れていた。

「な、な…」

一気にサスケの血の気が引いて行く。

「サスケ殿。立ち止まってはなりません。我らの動きは向こうに把握されてござる」

ナルトの叱咤に何とか足を止めることはなかったが、進むごとにサスケの顔色は悪くなっていく。

見知った人々が、親戚達が、大量の血を流して死んで居るのだ。

揺らぐ事なく駆けるナルトの背だけが、今のサスケの精神を繋いでいた。

「！父さん！母さん！兄、さん…？」

「遅かったな、サスケ。ナルト君も」

「…」

ようやくイタチの視界に入ったサスケはイタチが予想した通りの驚愕の顔を見せた。

だが対照的にナルトはただ厳しい表情を崩さない。

サスケより大分開けっ広げながら不思議と分別のついた子だと思っていたが、普通なら大人でさえ卒倒しかねない大惨事を見てなお顔色すら変えていないのは予想外だった。

サスケの眼が縫るようにナルトに向けられ、その小揺るぎもしない

背を確かめてイタチを見詰め直す。

それが何故か気に入らない。

（何故か？ 弟離れできていないだけだろう…）

内心己の愚かさを嘲笑いつつも、この場でイタチがやるべき事はサスケを限界まで追い込み、拭いようのない憎しみを自分に向けさせることだ。

そのためにはやはりまずこの少年を除かねば、サスケを本当に追い詰めることは出来そうにない。

上忍試験に受かった時教えられた九尾の器が弟と親友になるとは思わなかったが、サスケが万華鏡写輪眼を開眼するために今殺す訳には行かない子供だからと、気絶させるに留めるべく距離を詰める。しかし避けるかと思われたナルトは逆にこちらに向かって飛び込んで来ていた。

「サスケ殿！ お下がりでござれ！」

「ナルト！ 兄さん！」

そう叫んで振るわれた短槍は、この歳の子供とは思えないほど重く鋭い攻撃を繰り返してくる。

たった二、三合ほどでイタチの腕は痺れかけていた。

（これが九尾の器の力なのか？）

苦無で牽制して距離を取ればナルトも無理には追って来ず、その冷静さに驚嘆するしかない。

「兄さん、何で！？ 何があったんだ！？」

サスケが叫ぶ。

その悲痛な表情にすぐに駆け寄って抱き締めてやりたい気持ちが湧くが、それでは意味が無いのだ。

うちの誇りを取り戻し、サスケを英雄として新たなうちの歴史を紡ぐためには。

じりじりと距離を測り合いその強い眼差しを搦めて、サスケごと幻術に巻き込むべくチャクラを練り上げた。

ナルトと対峙する兄の冷たい視線に搦め捕られた、と思った瞬間、世界が歪んだ。

幻術に掛けられたのだ、と理解する冷静さが残っていたのはほんの数瞬だけだった。

怒涛のように押し寄せる、むせ返るほどの血臭と怒号と悲鳴が脳を揺らす。

サスケが見ているものは影だ。

ただ既に終わった出来事をリピートしているに過ぎないことは解っているのに、切り離せない。

痛み、恐れ、怨み、血と死と涙、あらゆる醜い感情が剥き出しで襲い掛かる。

惨劇の中心で舞うのは、兄：イタチで、角の肉屋が、八百屋の娘が、親戚達が、父が、母が、その凶刃に倒れて行く。

（怖い怖いこわいコワイ）

サスケの世界が崩れて行く。

（屍にたくない死にたくないしにたくないシニタクナイ）
死への恐怖が溢れ出す。

（助けて、たすけて…誰か！！）

解放と救済を何かに縋って求めた。

赤い赤い壊れた世界で、澄み切った輝きを放つ紅蓮の焰を見た気がした。

「…っう、わあああああああっ！！」

たった七歳の子供が受けるにはあまりにも大きすぎる負荷、ストレスに、サスケの意識はふつと途切れた。

第六話：うちは事変・前編（後書き）

間が空いてしまった：納得する形に持って行くのに躓きました。
御視聴ありがとうございました。

第七話…うちは事変・後編

「はっ、はっ…はあっ…！」

駆ける、駆ける。

木のうろに隠した荷を取り、また駆ける。

宵闇に沈む木の葉隠れの里を離れ、逃走を開始してなお、イタチは己が五体無事に居ることが信じられなかった。

あの九尾の妖狐の化身と、それを心酔させる紅蓮の焰…彼らが大人しく己を解放したことが。

己が長い時を掛けて思い究めた結論が、たった一人、否二人の不確定要素に斯くもたやすく覆されるとは、思ってもみない結果となった。

彼らが白と言い切ったならば、その通りになってしまいう気がした。

「不思議な…不思議な男だ。うずまき、ナルト…」

あんなにも強く惹き付けられる存在は初めてだった。

（あの男とサスケが作る木の葉が見たい）

ふとそう思った。

悲嘆と絶望の旅立ちになるはずだった…だが今は小さな希望の火が点っている。

それがとても嬉しいことのように思えた。

サスケが意識を覚醒すると、まず見慣れないがどこか見覚えがある天井が目に飛び込んできた。

（此処は…？）

「あ、起きた？」

ひよい、と視界に橙色の髪の子細の男が入って来た。

「上月、さん？」

それは親友の保護者で、父の部下の一人でもある己と同じ音の名を持つ男だった。

枕元に座っていた男は赤茶色の眼を細め、片手に携えた盆から吸い飲みを差し出してきた。

「取り合えず、水飲んで。詳しい話は後でね」

抱き起こされ、適温に冷まされた白粥を口に突っ込まれて眼を白黒させて飲み込むと、また次を押し込まれる。

あまりに絶妙なタイミングで、結局食べ切るまで話し掛けることも出来なかった。

だがお陰で多少頭の中を整理する時間が出来た。

そこへバタバタと足音高く誰かが駆け込んでくる。

「ただいまっ！ 佐助ええ！ サスケ殿は目覚められたか！？」

ごず、と明らかに襖ではない音がするのは、サスケの家にもあった鉛入りの重装建具なのだろう。

20Kg程あるその襖は、大人か訓練された忍びの子しか開けられないため、侵入禁止の部屋に着けられるものだ。

それを軽々と押し開いて入って来たのは、金色の髪をなびかせた臍脂色のシャツを着た子供：親友のナルトだった。

「こら旦那！ 廊下を音立てて走っちゃ駄目って言うてるでしょ！？」
そのナルトを橙色の髪の子細の佐助は、入って来るなり叱り飛ばした。

微妙に怒る論点がズレている気がするが、音を立てなければ走っても構わないのだろうか。

「旦那は忍びになるんでしょう？ 普段から足音は消していかなきゃ。」

ただでさえ全面うぐいす張りにしてあるんだから」

それはサスケも何度か両親や兄から受けたことのある注意で、親近感が胸を温めた。

「うう、すまぬ。以後、気を付ける…」

「気持ち解るけどね。お茶が来る前に荷物置いて来なさい」

「解った。サスケ殿！」

ぐりんっ、とナルトの顔がこちらを向いてきて、サスケは思わずびっくりと肩を跳ねさせた。

「う、うん？」

しかしそんなサスケの様子には頓着せず、ナルトはニツコリと満面の笑みを見せた。

「サスケ殿が無事お目覚めになられて良かった！某は嬉しゅうござるよ！」

全身で喜びをあらわにするナルトに、サスケはようやく笑顔を浮かべることが出来たのだった。

「さて、何処から話そうか？」

茶を煎れてきた佐助が口を開く。

それを生まれ変わって透き通る青色になった瞳で見上げたナルトは、もう一人のサスケに目を移した。

顎に掛かりそうな黒の前髪を中央で割った間から、白い額が見える。俯き加減だった顔を上げたサスケ少年は、その黒玉の瞳を決意に瞬かせて佐助を見上げた。

「何があつたのか、教えてください」

布団の上で正座した膝に載せられたサスケの小さな手は、節が白くなるほど固く握り締められている。

「ん。俺様も途中から駆け付けたからその前のことは解らないんだ

けどね。まずは事務的な話からいこうか」

佐助はず、と茶を一口啜り、口を湿らせて話し始める。

「まずうちは一族は君とイタチ君以外全滅だ。ちょうど殆どの一族が里帰りしてたから見事なまでに根こそぎね。木の葉隠れの里は、うちはイタチを同族殺しのS級指名手配犯として登録することを決めた。今月中には全国に手配が行き渡るだろう。此処まではいいかい？」

「…っ…はい」

苦しそうに顔を歪めるサスケにナルトは咄嗟に手を伸ばして、その小さな頭を優しく撫でていた。

「…ナルト？」

サスケは驚いたのか目を丸くしてこちらを見た。

昔まだナルトが幸村だった頃に、誰よりも敬い崇めた主が病に倒れた時、惑う心を置き去りにのしかかる責任と恐怖に押し潰されそうになった。

あの時、打ちのめされる己に多くの人々が手を差し延べ、支え、叱咤激励してくれた。

それは幸村にとって大いに救いであつたし、その後一時は回復の兆しを見せた信玄公が病没した時も、哀しみはあつたが落ち着いて受け止めることが出来た。

サスケもまた本人やイタチの真意はどうあれ、うちは一族の再興のために仇討ちを成し遂げなければならぬ。

さもなければうちはの雷名は地に堕ちることになり、忍びの世界で生き残ることは出来なくなるのだ。

（友を見捨てる訳には行かぬ。しかしかつてのような乱世ならともかく、兄弟で争うなどという哀しいことはさせとうない。やはり、根本から変えていくしかない）

今度は、自分こそが誰かの支えとなる。

その決意を込めて、ナルトはサスケの眼を覗き込んだ。

「そなたには某達が付いております。哀しむなどは申しませぬが、

どうぞ臆する事なく前へ進まれよ」

肩に片手を置き逆の手で握り拳を作って見せると、うるりとサスケの眼に涙が滲んだ。

「…っ、あり、がと…」

かすれた涙声が、部屋に響いた。

ひとしきり大泣きしたサスケは、羞恥に頬を赤らめてナルトと佐助を見た。

優しく微笑むナルトがとても大きく見える。

(ナルトには、敵いそうもないな…)

器の違いを痛感した。

「サスケ殿は、あの時の事は何処まで覚えておられますか？」

そう尋ねるナルトに、サスケは顔が強張るのを感じた。

幻術の記憶が脳裏を過ぎる。

「某はイタチ殿の幻術に掛かり、恥ずかしながらこの佐助が駆け付けてすぐに気を失ってしまい申した」

ぐ、と悔しさが喉元にまでせりあがってくる。

ナルトは幻術に耐え切ったのに、気絶した己がふがいなかった。

「僕は、幻術に掛かってすぐに…上月さんは、兄さんと何か話せましたか？」

悔しいが、これが今の実力差なのだろう。

気を取り直して佐助青年を見上げるが、両手離して肩を竦めて見せてきた。

「俺様が駆け付けて、旦那が倒れた隙に逃げられちゃったからね。

話せはしなかったよ」

「…そう、ですか…」

兄は、一体何がしたかったのだろうか。

考えても答えが出ないことは解っているが、それでも思いは馳せてしまう。

「つまり旦那が見た以上のことは君も知らないって事だね。まあ、詳しい事情聴取はまた改めて取ることになるから、それはその時にで、ここからちよつと突っ込んだ話になるよ」

「？」

話を切り替えるためか、ぱんと膝を叩いて佐助青年はサスケの前に紙の束を差し出した。

「今回の事件で君は孤児になった。この里では孤児は一旦火影預かりになるのが通例なんだけど、一応本人の希望を聞いておけて言われててね。これは里親候補の書類だ」

取り合えず紙束を受け取り、サスケはこれからの事を考えてみる。家族の事、親戚の事、知人達の事…思えば哀しみとやる瀬なさに胸が痛むが、不思議と気持ちは澄み切っていた。

（僕はどうしたい。最後のうちは一族として、何をするべきだ。兄さん…）

どんなに嘆いても、時は戻らない。

何故兄はあのような事件を起こしたのか、その理由は解らないが、今まで兄の愛を疑ったことはなかった。

確かに兄は、サスケを、家族を、里を愛していた。

ならばきつと、兄は苦しんだはずだ。

（兄さんと話がしたい。兄さんの前に立つための力が…強さが欲しい）

「…希望が、通るなら…」

「どうしたいんだい？」

優しい佐助青年の声に後押しされ、サスケはきつと顔を上げた。

「…ナルト！」

「はっ、はい？」

ナルトはいきなりの事に驚いたようだが、それでも力強い仕種に嬉しそうな気配を纏って答える。

「僕は…いや、オレは強くなりたい！オレを弟子にしてくれ！」

サスケ少年の突拍子もない願いにさしものナルトも度肝を抜かれたらしく、眼を丸くしてうろたえた。

「えっ…ええっ!？」

それに追い撃ちを掛けるようにサスケ少年は続ける。

「お前は兄さんと渡り合った。兄さんはそんじょそらの奴らじゃ手も足も出ない程強い忍びだ。兄さんと互角だったお前は、アカデミーにいる先生達より強い！だから、お前につくのが強くなる近道だ！」

やはりこちらも驚きはしたが、佐助は内心ニヤリとほくそ笑んだ。大切な存在が褒められるのは嬉しいもの。

それに前々から漠然とだがうちは一族をナルトの味方に欲しいと思っていたのだ。

「そそそ、その様に言うて下さるのは嬉しいのでござるが！某はあくまで忍びとしては半人前以下でござるよ!？」

確かにナルト、というか幸村は数多いた武将達の中では、騒がしいが忍び地味な身軽な動きをすることで有名だった。

今は逆に武将としての振る舞いが抜けないため、忍びとしては中途半端な存在になりかけている。

うっかりナルトの教育計画に思いを馳せ出した佐助を置き去りに、子供達の会話は続く。

「でもお前が強いのは事実だ。安心しろ、忍びとしてのお前には期待してない。ただお前の強さが欲しい」

そう宣った少年の瞳は決意に輝き、その力強い眼差しにナルトは心打たれたようだった。

「サスケ殿…」

「兄さんに、何でこんな事したのか聞きたいんだ。だから、お願いします！」

少年はがばりと、拙いながら土下座を決めた。

「旦那、この子は本気だよ。なんなら忍びとしては旦那ごと俺様が面倒見ても良いし。それに、支えてあげるんでしよう？」

その後押ししてやれば、ナルトはしばし眼を閉じ。

「…解り申した…」

「！ナルト！」

サスケ少年がぱつと喜色を浮かべる。

「ただし、条件がござりまする。よろしいか？」

「言ってくれ」

「一つ、某と佐助の指示には必ず従うこと。某はいずれ火影となり、世の闇を減らす礎となる所存にござる。その時、そなたには某と共に改革の一手を担っていただきたい。たとえ里を相手としても、でござるよ」

「里を、相手にしても…」

それは幼い少年には酷な話かもしれない。

生まれ故郷を敵に回しても人のために尽くすのはあまりに険しい茨の道だ。

「旦那は優し過ぎるんだよ。別に好きに生きりゃ良いのにさ」

その流血を恐れない厳しさを備えた優しさこそが、彼の最大の魅力だと知っているけれど。

やれやれと肩を竦めてため息混じりに口を尖らせると、ナルトは宥めるような苦笑いを見せた。

「そう言うな。甲斐もお館様もない以上、これが俺のやりたいことなのだ。イタチ殿も血族を手に掛けるなど、容易ならぬ事情があったのだろう。俺はそんな世の闇に吞まれる者を減らしたいだけだ」
優しい笑顔と優しい言葉に、佐助少年は遂に覚悟を決めたようだった。

「ナルト…解った。オレはお前について行く。ご指導の程、よろし

くお願いします」

深々、と頭を下げる姿に重々しく頷いてナルトは言う。

「ではこれ以後、アカデミー外では俺の事は『師匠』と呼べ。良いな、小サスケ！」

「はい！師匠！」

「小サスケ！」

「師匠！」

「小サスケ！」

「師匠お！」

「小サスケえ！」

それは遠い昔の日常だった優しい思い出に似ていた。

懐かしさと主の変わらない所と変わった所につい苦笑が浮かぶ。

「おやおや、旦那も生き生きしちゃってまあ…」

きやつきやつとじゃれ合う子供達を飽きる事なく見詰めていた。

第七話：うちは事変・後編（後書き）

ちょっと長すぎたでしょうか。

でも切りの良いところまで行きたかったんだ：

御視聴ありがとうございました。

第八話：ナルトと忍術

はああと、深くため息を吐く。

「何故俺はチャクラが上手く使えないのか…」

また一つ、ため息を零してナルトは一人自習室で印を組み直す。

（臨・兵・闘・者・皆・陳・列・在・前：分身の術！）

渾身の力を込めた分身の術は発動こそするものの、何故かまともな形にならない。

せいぜいがもやつとした人型の煙のようなものが出る程度だ。

「くそっ！どうしたらよいのだ：分身の術と変化の術は必修課目だと言うのに！」

ナルトはじだんだを踏んで悔しがるが、そんなことをしてもどうしようもないことは己が一番よく知っている。

もうアカデミーの卒業試験まで一月もない。

いい加減どうにかしなければ、留年する羽目になる。

そんなことになれば目標が遠ざかるのは目に見えているし、サスケの師としての沽券にも関わる。

ここ暫くはずっとアカデミーに居残って練習を続けて、変化の術はだいたいものになってきたのだが問題は分身の術だ。

担任のイルカにも付き合ってもらったりしているが、彼にも仕事がある以上掛かりつきりにもなれない。

自宅の佐助とサスケの二人はもともと忍びとしての才能は天性のものがあり、それ故に逆に出来ない者の事は理解出来ないため頼りにならず。

「ほんにどうしたものか…」

ナルトはそろそろ本格的に途方にくれ始めていた。

最初、日向ヒナタがそこに通り掛かったのは偶然だった。

大人しく押しの弱いヒナタが教師からの頼みを断り切れず自習室の方角の倉庫へ資料を返却した時、一人自習するナルトを見掛けたのだ。

それ以来毎日ナルトの自習を覗くのがヒナタの日課になった。

ナルトは変化の術と分身の術を練習しているらしく、見ていれば変化の術はゆっくりとだが上達した。

気分を変えているらしいが基本的に変化するのはいつも同じ、襟足だけ伸ばして纏めたナルトと同じ髪型の鉢巻きを巻いた青年だ。

独り言を聞くに、服や髪、肌の色が思った通りにいかないらしい。

最近たまに尻尾のような髪の毛先が金色になるくらいで、もっぱら分身の術に比重を置いているようだ。

（頑張って、ナルト君…）

ヒナタがうずまきナルトという少年を認識したのは、アカデミーに入学して暫く経ってからだった。

クラス男子の中でも中心グループに近いナルトはいつだって元気いっぱい、自分には縁のない人間だろうと思っていた。

それがある日、体調不良で貧血を起こしたヒナタをちょうど同じ班だったナルトが保健室へ連れていってくれた訳だが、その運び方がいけなかった。

だって、所謂姫抱っこ、だったのだ。

当時はヒナタより背も低く細くて女の子の様だったナルトは、しかし柔拳の使い手として鍛えて重いヒナタを抱えて小揺るぎもしなか

った。

血継限界・日向宗家の初子として妹と比べられつつも大事に大事に育てられたヒナタは、父と叔父、従兄以外の男性との接触はほぼ皆無だったため、ナルトは真っさらなその心に初めて触れた異性として強く焼き付いた。

あれが全ての始まりだった。

女子供は守るものと考えるナルトはヒナタを重保護カテゴリに入れたらしく、何かと手を差し延べるようになり、その度ヒナタはナルトに惹かれるようになり：今では完全な恋心へと成長した、と言う訳だ。

（ああ、話し掛けたいなあ：でも私口下手だし、気持ち悪がられたらどうしよう：）

もう来月にはアカデミーの卒業試験がある。

それをクリアすれば班分けが行われ、そこで同じ班になれば合同任務でもない限りそうそう会うことも出来なくなる。

言うなれば今が最後のチャンスなのだが：

「日向殿？何ぞあり申したか？」

目の前に、変化の術を使ったナルトがいた。

「時間も空いたし、ナルトの様子でも見てやるかな：」

卒業試験に向けての書類整理を終えたイルカは、凝り気味の肩を回しながら自習室にいるだろう問題児を思う。

あの紅と金色の子供はチャクラ操作が下手くそで、今までまともに忍術を発動できていない。

最近ようやく変化の術が形になってきたと言っていたが、まだ時間が合わず見てやれていなかった。

渡り廊下の途中で窓ガラス越しに自習室の入口が視界に入る…と同時にイルカは窓枠の下に隠れた。

（あれは…ヒナタ？）

癖のない黒髪と白銀の瞳を持つ引込思案な少女は、ちらちらもじもじと自習室を覗いている。

そこにはナルトがいるはず、そういえばあの娘はナルトの事を好んでいるそぶりを見せていた。

甘酸っぱい初恋の気配に微笑ましい気分になる。

声を掛けられないようであるし、そろそろ助け舟を出してやろうかと思った瞬間、中からひょこりと影が現れた。

息が、詰まった。

【誰よりも紅の似合う主人】

『お前達には悪いが、俺と共に死んで貰うぞ』

【覚悟を笑みに乗せる橙色の髪 of 忍隊長】

『もちろん。我ら真田十勇士、幸村様の刃として死ぬが本望ですから』

【共に戦い抜いた仲間達】

『海野オオオオッ！』

【寄る年波に勝てず脱落してしまった己】

『私は此処までのようです。皆さん、幸村様をお頼み申します…！』

【引き抜いた導火線】

【爆炎】

【痛み】

【闇】

【…無】

気が付けば、窓の棧に手を掛けたままその場にへたりこんでいた。

唐突に蘇った記憶に頭痛がする。

「幸村：様…」

血の気が引いてくらくらする頭を抱え、のろのろと立ち上がって窓の向こうを見るが、すでにヒナタと赤い青年の姿はない。

何故かそれにホッと息を吐いて、イルカはその場を離れた。

今はまだ、向き合えそうになかった。

自習室を覗き込むヒナタに気付いたナルトは、彼女を中へと招き入れた。

「日向殿も自習でござるか？」

中に戻って気晴らしに掛けていた変化を解くと、少女は目に見えて安堵の表情を浮かべた。

ナルトは気付いていないが、『幸村』の顔は十分に美形と呼べるもののため、男性との接触経験の少ないヒナタには緊張せざるを得ないレベルなのだ。

「そ、その！あの、えっと…」

顔を真っ赤にしてもる彼女は何か伝えたい事があるようなので、ナルトはじっと黙って待つ。

ただヒナタの顔がどんどん赤みを増していくのが心配だったが、意を決したらしい彼女はいつもなら考えられないくらい大きな声で叫んだ。

「な、ナルト君の自習、お手伝いさせて欲しいの…！」

「！なんと！某には大変有り難い申し出でござるが、日向殿のお時間にはよろしいので？」

気持ちには涙が出るほど嬉しいのだが試験が近いのは彼女も同じ事、迷惑になってしまっではいけないと思う。

「だ、大丈夫だから」

何故か真剣な眼で意気込んでいる。

「それでは、お願いいたしまする」

「う、うん、ありがとう。それでね、その、出来れば苗字じゃなくて、名前で呼んでほしいなーなんて…」

「おお、解り申した。早速御指南の程よろしくお願いいたしますぞ、ヒナタ殿」

「うん！」

そうしてヒナタの忍術教室が始まった。

「…それでは、某のチャクラは精神えねるぎーと生命えねるぎーの均衡が出来ていないと？」

日向一族の血継限界、白眼をも用いたヒナタの見たナルトの症状はそのようなものだった。

「うん、あのね、ナルト君の場合生命エネルギーの量に対して、精神エネルギーの割合が多過ぎるの。だから、もっとゆったりした気持ちでやってみると良いんじゃないかな」

これは白眼で見なければ解らないことだったのではないかとヒナタは思う。

もっと早く話し掛ければ良かった。

「なんと、そのような事だったとは…解り申した。ではいざ！」

ナルトは感銘を受けたように頷き、早速チャクラを練り始めたが、白眼のまま見ているとまた精神エネルギーを多く込めようとしているではないか。

ヒナタは大慌てで止めた。

「あああ、だから！気合い入れるんじゃないくてゆったりと、だよ」
そう言って止めてから、自分からナルトの腕に触れたことに気付いた。

（さ、触っちゃったああああ！）

不自然にならないようにそっと手を外したが、布越しでも解る固く引き締まった筋肉質な腕だった。

柔拳使いの父や従兄とはまた違う筋肉の付き方をしているらしい。

「す、すみませぬ…ええと、静かなること林の如し、動かざること山の如し…」

ナルトはバクバクと脈動を早めるヒナタには気付かない。

何やらぶつぶつと呟きながら息を整え、改めてチャクラを練り直して印を結び始める。

ぼふん、と先程試して見た時より濃い煙が溢れ、ナルトの傍らに本人そっくりの少年が立っていた。

「お…おおお！」

（な、ナルト君が二人…！）

そうだった。

分身の術を使えば当然、もう一人増えるのだった。

一人でさえ既にキャパオーバーしそうなものにもう一人、それも実に嬉しそうなキラキラしい笑顔だ。

「「ヒナタ殿おおお！ほんにありがとうございますああああ！」

！」

ステレオで右から左から感極まったナルトに叫ばれて、ヒナタの頭は熱暴走の末ブラックアウトした。

「「ひ、ヒナタ殿おおお!?」」

第八話：ナルトと忍術（後書き）

ナルヒナ派です。

温かい御感想ありがとうございます。

御視聴ありがとうございました。

番外編その2…うちはサスケの憂鬱

うちはサスケはうずまきナルトと共に、特別上忍上月佐助の被保護者となった。

両親の財産とうちは宗家の屋敷、それから一族の秘伝以外は全て里の管理下に置かれる事になり、葬儀が終わるとサスケは三代目に管財人とハウスキーパーの紹介だけしてもらって上月邸へと引っ越した。

今日は二人が歓迎のパーティーを開いてくれるらしい。

ナルトに手伝いなのか邪魔なのかしてもらいながら荷を解き、あらかた片付け終わった頃、佐助が顔を出した。

「旦那達も終わったかい？こっちも用意出来たから居間においで」
招かれるまま台所に隣接する居間に向かえば、古式ゆかしき木のテーブルに様々な料理が並べられていた。

「おお！これはまた随分と豪勢だな佐助！」

「俺様張り切っちゃったよ。トマトが好きって聞いてたから、洋風で攻めてみました☆」

どどんと鎮座する土鍋の中にトマト風味のブイヤベース、大皿に盛られたペンのアラビータ、ケチャップでうちは模様やら六文銭やらが描かれたオムライスに、プチトマトを散らしたポテトサラダ…全体的に実に赤いラインナップだった。

三人で食べるには些が多い気がするが、考えてみれば普段重箱の二段弁当をぺろりと平らげるナルトがいるのだ、これで丁度良いくらいなのだろう。

「それじゃ旦那、音頭よろしく」

人数分のオレンジジュースを配った佐助が言う。

「うむ、では…小サスケの引っ越し祝いと幸多き未来を願って、乾杯！」

「乾杯！」

「か、乾杯！」

NARUTO（真田紅虎伝） 番外編その2…うちはサスケの憂鬱

木の葉隠れの里の二大血継限界の一つ、うちは一族最後の生き残り・うちはサスケは教室内に巻き起こった大惨事に頭を抱えてため息を吐いた。

先程まで調合の授業だったのだが、朝から青い顔をしていた日向ヒナタがふらりと倒れかけ、それを側に立っていたナルトが抱き留めた。

それはいい。

担任のうみのイルカにその旨伝えて、保健室まで連れていくことになったのもまあいい、が。

（お姫様抱っこはないだろ…）

普段サスケに群がる少女達を『おなごがかようにおのこに迫るものではないでござる！破廉恥！』と言っていたが、お前も大概破廉恥じゃないかとサスケは思う。

おかげで女子の声と視線がきやあきやあ五月蠅い。

「くそっ、何でオレはヒナタと同じ班じゃないんだ…！」

「クウン…」

背後の班に座っていた犬塚キバがぎりぎりと言業机に爪を立て、その足元でいつも連れている赤丸が困ったような鳴き声を上げている。

「あ…私も目眩が…サスケくうん、保健室連れてってえv」

サスケの右隣りに座っていた淡金色の髪の山中いのがわざとらしく

ふらりとしな垂れかかってくる。

「ちよつといの！あんたみたいな健康優良児が目眩なんかする訳無いでしょうが！サスケ君から離れなさいよ！」

今度は左隣りの桃色の髪の春野サクラがサスケにしがみつきながらいのに噛み付く。

そこから騒々しい口喧嘩が始まり、キャットファイトに移行し始めサスケは頭痛の上に目眩がした。

（ナルト…助ける！）

内心で今この場にいない師であり親友である男に助けを求めるが、いない以上どうしようもない。

いつもならば此処でナルトの『破廉恥でござるうううっ！』が入ってうやむやに出来るのだが…

「おゝまゝえゝらゝ…静かに、せんかああああっ！！！」

先にイルカが切れたようだ。

放課後、サスケとナルトはその日あったことを話しながら上月邸へと帰宅した。

それぞれ部屋で着替えると地下の修練場へ下りる。

サスケは此処で向かい合う時のナルトが一番好きだった。

変な意味でなく、ただまっすぐにサスケを強くしてくれようと一挙一動見逃さぬように見詰めるその眼は、それ以外の何の思惑もなくて潔い。

「脇が甘い！もう一步深く踏み込め！」

「相手の間合いを外せ。常に十手先を読むのだ！」

「良いぞ小サスケ。その調子だ！」

こうして相手をしてもらって改めて理解したのだが、ナルトの力量は今のサスケとは雲泥の差があった。

「佐助。俺の相手をせよ」

「はいはい。合わせ武器？得意武器？徒手？」

「今日は得意武器だ」

つい先程までサスケが汗だくで動けなくなるまで組み手に付き合ってたなお、自分の鍛練に上月を呼び付ける余裕があるのだ。

その間佐助は上月の影分身に差し出された水を啜るので精一杯だったりする。

（上月さんもとんでもないよな…）

今こうしてサスケの面倒を見つつナルトの相手をし、上の台所では晩御飯の用意をしているのだ。

だが明確な強さの目標が近くにいるのは良い刺激となる。

ナルトはいずれ火影になる男だと確信している。

その傍らに立つに恥じない漢になろう、とサスケは改めて決意した。

「時に佐助」

「何？旦那」

「何やら腹が痛いのだが…」

「？…旦那！棚の甘辛煎餅食べた！？」

「うむ」

「あれまだ慣らしてない毒が塗ってあるんだよ！？勝手に食べるな
って何度言ったら解るの！！」

「…段々痺れて…」

「何やってんのもおおお！！」

…本当に、大丈夫だろうか？

番外編その2..うちはサスケの憂鬱(後書き)

後書きって何書けば良いんでしょうね。
御視聴ありがとうございました。

第九話…始まりのこと

思い返してみればアカデミーの三者面談の時、授業参観だとかイベントの度、ナルトとサスケの保護責任者として現れた橙色の髪の青年は自分達を率いていた忍隊の長とまるっきり同じ顔をしていた。今考えれば何故気付かなかったのかと思うが、あの男より主の方が優先順位が高いのは当たり前なのだから、ある意味必然だったのだろう。

記憶を取り戻して改めて見れば、世界は今までと違う色を帯びた。まるで夢から覚めたような。

或いは夢でも見ているような。

卒業試験前日の夜、イルカは火影岩の上で上月邸が建つ方角をじっと見詰めた。

二日前、ひそかに撒いた五色米による連絡方法…真田忍独自の撒き方で指定したこの場所に、あの男が真に猿飛佐助であるならば気付いてやって来るはずだと確信している。

暗闇に溶け込むような墨竹色の服を着込み、佇むイルカはやがて風が変わったことに背後を振り返った。

「…担任のイルカ先生？」

「お待ちしておりました。上月さん…いや、武田軍真田忍隊長、猿飛佐助殿」

NARUTO（真田紅虎伝） 第九話…始まりのこと

サスケが風呂から上がると、先に上がっていたナルトが首にタオルを掛けたままソファに腰掛け、上月から与えられた巻物を読んでいた。

その金の髪がまだしっとり湿っているとところを見るに、上月は近くにはいないらしい。

常ならば、そんな状態のナルトを上月が放置するはずはないからだ。

「師匠、上月さんは何処に？あとちゃんと髪乾かせ」

そう問い掛けつつ指摘すると、思い出したようにタオルを動かし始める。

「何やら約束があるとかで出て行ったぞ。先に寝ておるようにこの事だ」

「ふーん…なあ師匠、ちょっと聞きたいんだけど良いか？」

あまりに雑な拭き方に、タオルを奪って丁寧に拭き直してやる。

それに気持ち良さそうに眼を細めながら、ナルトはサスケを見上げた。

「何だ？」

「師匠と上月さんが主従だったのは聞いたけど、どうして二人が主従になったのかは聞いてないなって思ってたさ」

主従というよりは家族といった方が近いのだが、二人の間には常に一定の線が引かれていて、表に出た時は特にその線が明確にされる。それは実に年期が入っていて、アカデミー内外で呼び方を変えるだけでも覚束なかったりするサスケには不思議に思えていたのだ。

「そうだな…もうアカデミーも卒業するし、良い機会だ。俺と佐助について知っておいて貰うのも良いかもしれん。長うなる故、布団に入っておくか」

サスケの問いに一つ頷くと、ナルトはそう言って語ること了承した。

「解った」

二人して火の元照明戸締まりを確認して、寝室に入る。

押し入れから布団三組を取り出して敷けばあとは眠りに就くばかり、それぞれ個室を持っているが、寝るときは同じ部屋で眠ることになっていた。

廊下側から上月、サスケ、ナルトの順で川の字となっている。

「良いか？」

「ああ、頼む」

頭から布団を被って話しやすい体勢を取り、ナルトはゆっくりと語り始めた。

「…そもそも、小サスケは輪廻転生という概念を知っておるか？」

「？ええと、仏教用語で生きとし生けるものは死んでもまた様々な姿で生まれ直すってやつ？」

何故そこから話が始まるのか。

不審に思っテナルトを見ると、何処か遠い眼をしていた。

「いかにも。俺は『うずまきナルト』になる前にも、人間として生きていた記憶があるのだ。その時の名は、『真田源二郎幸村』だった」

思わず思考が停止した。

何を馬鹿な事と思うが、同時に納得も出来た。

遊ぶ時だって悪戯する時だって、ナルトがいれば皆何となく安心してはっちゃけることが出来る。

その不思議な安心感は今の話を信じさせるだけの説得力を持っていた。

「…さなだげんじろうゆきむら」

呆然と音だけ繰り返すと、ナルトはこくりと頷いた。

「左様。日ノ本と呼ばれる島国の甲斐国信州上田の主、真田昌幸の次男として俺は生まれた。時は群雄割拠の戦国時代であった…」

「真田十勇士第四席、海野六郎うんのろくろうがご挨拶申し上げる」

古式ゆかしき五色米、しかも真田忍隊で使われていた方式で撒かれていた伝言に従って訪れた先にいたのは、鼻の上に横一文字の傷を持つ顔見知りの青年だった。

ナルトとサスケの担任、うみのイルカ教諭は歳に似合わぬ貫禄を漂わせた微笑みを浮かべて見せた。

「…海野？」

今の己は凄くマヌケな顔をしている気がする。

「いかにも…お久しゅうございます、長」

「本当に？」

そう尋ねると、イルカはさらに笑みを深めた。

確かに纏うその雰囲気は記憶にある忍隊の相談役に酷似してはいる。

「証拠が欲しければ幾らでも。長のかすがさんの姿絵の隠し場所は幸村様のお部屋の北から二本目の梁だとか、実は十勇士にはばれていたとか、戦の時横着して千本の代わりに団子用の串で戦ってたとか、ついでにその串も実は幸…」

「わーっ！もういい！」

羅列された思い出、知りたくなかった事実、抹消したい記憶…こんな身内しか知りようのないことを言い募られれば認めるしかない。

「ホントに、海野さんなんだ…何でまた今更？」

既に何度も会っているというのに、今までそんなそぶりはちらとも見せてこなかっただけに、不思議に思う。

イルカは笑みを苦笑に変えた。

「きっかけは、ナルトが変化の術で幸村様のお姿に化けているのを見たことでした。確認ですが、ナルトは幸村様ですよね？」

長が幸村様以外を主として接する訳無いですし、と続けられれば、半笑いになるのが抑えられなかった。

同じ穴のムジナだろうとは思うが、今は黙っておくことにした。

「そうだよ。驚いたけど、また会えて嬉しいよ。旦那にはまだ？」

「ええ。明日の卒業試験が終わったら、改めてご挨拶に伺うつもり

です。他に私のような者は現れましたか？」

「いや、海野さんが初めてだよ」

「そうですか…それにしても」

そこでイルカは里の方を見下ろした。

もういい時間帯だし、ぽつりぽつりと明かりが消えていく。

ナルト達もう寝る用意を始めている事だろう。

「ナルトが幸村様で良かった。幸村様ならば、けして九尾の妖狐の力を悪用したりしないでしょうから」

そう呟くイルカはひどく優しい顔をしていて、彼は確かにこの里の人間なのだと理解した。

「海野…いや、うみのイルカさん」

「はい？」

「一つだけ言っておかなきゃならない。俺も貴方も真田の旦那も、死してこの世に生を受けた。貴方は貴方に、旦那はナルト様に。そして…」

イルカの傍らに立って里を見渡し、一つ息を吐いて覚悟を決める。

「…俺は、九尾の妖狐に」

ざあ、と夜風が吹き抜けた。

「…父上もまた甲斐国国主武田信玄公にお仕えする武将だった。『甲斐の虎』と称されるお館様に『虎の両目』と言わしめる知将でもあり、内では家族の団欒を忘れぬ優しい方だった」
かつての家族を思い浮かべる。

兄も姉も己も弟も妹も、皆ほとんど父親似だった。

姉妹達の髪だけが、公家出身で緑の黒髪と誉めそやされた母の質を受け継いでいたが…全体的に童顔一家だった。

「良い親父さんだったんだな」

サスケがそう言って笑う。

おそらく自分の家族を思い出しているのだろう、少し表情が歪んだ。「ああ。故に父上が戦で討ち死になされた時は荒れに荒れてな。お館様にさえ食ってかかってしもうた」

あの頃の己は本当に幼くて、思い出しても顔から火が出る思いがする。

「お館様はそんな俺をも受け入れ、厳しくも優しく諭して下さった。今もなお、俺の指針であり続けるほど器の大きい方だ」

あの頃の俺は、あの方の後継として相応しくあれただろうか。否、これからも精進あるのみとナルトは決意を新たにする。

「佐助は、俺に付けられた最初の忍びだ。真田源二郎幸村として生きた二十四年の大半はあやつと過ごした。もう俺から解放されても良いだろうに、まだついて来てくれる」

それこそが、佐助に報いることになるのだろうと考える。

「俺がお館様の教えを捨てぬように、あやつも俺の忍びであることを止めぬのであろう。ならば俺はあやつの主たるに相応しい漢であらねばならぬ。小サスケよ」

サスケは神妙な顔で話を聞いていた。

「これが『俺達』の始まりだ」

第九話：始まりのこと（後書き）

ツイッター始めました。

ユーザー名：sakyo | 365 | japan

よろしければご利用下さい。

御視聴ありがとうございました。

第十話：最初の一步

少年には一つ秘密があった。

それは誰にも言ってはいけない：言えは敬遠されること必至の秘密だ。

ある朝、ふと目覚めれば少年は一つ年下の弟分に肩を揺すられていた。

『兄さん、朝だよ』

少年には少年たる記憶が無かった。

まるでぽっかりと空っぽになった少年の中にするりと入り込んでしまったように。

『君は：誰？』

黒髪と白大理石のような肌を持つ少年にそう問い掛けると、彼は訝しげに見てくる。

『兄さん？寝ぼけてるんですか？』

そこは狭い中に寝台が二つ並んだ部屋であるようだ。

『僕は：？』

ぼんやりと呟くと、目の前の少年はやれやれと言わんばかりにため息を吐いた。

『何かの遊びですか？仕方のない人ですね。僕はサイ。貴方はシン。思い出しましたか？』

あいにくと覚えはない。

己は最期の特攻用の火薬玉を全て点火させ、辺りを巻き込んで自爆したはずだった。

運よく命拾いしたのだろうか。

『シン？：知らない。僕は穴山小助だよ。此処は何処だい？助けてくれたのは嬉しいけど、僕は』

生きているのなら帰らなければならぬ。

赤い紅い主の元へ。

『…嘘だろ』

『？』

呟く声にサイと名乗った少年を見上げれば、彼はひどく驚いた顔をしていた。

『本当に、小助か…？』

小助を見るその表情は恐れを抱いているような苦しんでいるような、それでいて眩しいものを見るような不思議なものだった。

『…君は誰？』

改めて尋ねる。

『才蔵だ。真田忍隊副長の霧隠才蔵。なんてことだ、シンが小助だったなんて』

その名に、小助は目を見開いた。

『副長？何でそんな子供の姿に…』

上から下まで見詰め直しても、まだ十にも満たない姿は幻術の類いではない。

『私だけではない。お前も子供になってるんだぞ』

『ええっ！？』

そう言われて見下ろせば、確かにその手は胼胝が出来始めているが全体的に小さくふくふくと柔らかい。

『詳しい話は後だ。朝飯に間に合わん。移動するぞ』

彼はそう言う和小助の手を取って立ち上がらせた。

『ちょ、副長！？』

少年となった才蔵に手を引かれ、二人は狭い廊下を走り出した。

少年には秘密がある。

自分と弟分には、前世の記憶があるという秘密が。

今日、ナルトとサスケ少年は卒業試験に挑む。

夕べの会合で佐助の頭は少し飽和しかけているが、今夜は卒業おめでとうパーティーの予定だ。

結果に関しての心配はしていない。

サスケ少年はもともと天賦の才を持っているし、ナルトもついこの間課題の分身の術を習得した。

その習得に貢献したという少女と何やら礼をするしないで一悶着あったらしいが、それはまた別の話だ。

「「ただいま」」

「お帰り旦那、サスケ君。試験はどうだった？」

帰ってきた二人にそう声を掛ければ、満面の笑みが返ってくる。

「余裕で合格であったぞ！」

「当然っすよ」

「それは良かった。これでアカデミーも卒業だね。今日はお祝いだよ。さ、手を洗っておいで」

二人を促し、佐助は一人料理を並べ始める。

楽しく団欒し、デザートまでぺろりと平らげて満足そうなナルトとサスケ少年に、佐助は居を正して声を掛けた。

「さて、ご馳走様したところで、俺様から二人にプレゼントがあります」

「「？」」

「アカデミー卒業祝いだよ。重いから気を付けて」
そうして差し出したのは二つの桐箱だ。

蓋を開いた二人はそれぞれ息を呑む。

「これは…」

「凄い…！」

ナルトには以前幸村が使っていたものを模した朱塗りの双槍…朱羅を。

サスケ少年には己と同じような鎖で引き寄せることも出来る甲賀手裏剣だ。

里の工房に今日のために依頼したこの武器達には、何よりも二人の無事を願っている。

それを見たナルトは眼を潤ませるとぱちぱちと瞬いて水分を飛ばし、佐助を見上げてきた。

「…礼を言うぞ、佐助よ。必ずやこの槍で盛大な武勲を立て、無事に帰還して見せよう。ありがとう」

「オレも。ありがとうございます上月さん。この甲賀手裏剣、大事にします」

サスケ少年も大層嬉しそうに笑った。

「どう致しまして。それともう一つ、これは旦那に紹介したい人がいるんだ」

ナルトとサスケに笑顔を向けて、上月は庭に面した障子とガラス戸を開けた。

庭先に、一人の男がいた。

室内から溢れる光と庭に蔓延る影に滲むように平伏す男の顔は、家の中から見る事は出来ない。

「さあ旦那」

上月が促せばナルトは困惑したような眼を向けるが、意を決して男に声を掛けた。

「面を上げよ」

堅い声に男が顔を晒す。

「イルカ先生？」

サスケは驚きを隠せなかった。

そこにいるのは確かに、今日も二人の前で試験を進行していた教師のイルカに外ならない。

何故あえて上月の紹介を受けなければならないのか？

「：武田軍真田忍隊所属、真田十勇士第四席・海野六郎改め、木の葉隠れの里アカデミー教官、中忍・うみのイルカと申します。願わくば、今再びお仕えさせて頂きたく参上致しました」
さしものナルトも驚愕を隠せぬ様子で、息を呑む音の後、しばしの沈黙が辺りに下りる。

つまりイルカもまた昨日聞いたナルトの過去世に関わりがある人間だということのか。

「：海野」

「はい」

ナルトがようやくと搾り出した声は酷く掠れていた。

「それは『お前』の遺志か。『イルカ殿』の意志か」

声の調子と発される覇気から、ナルトが偽りを許さない厳しい顔をしているだろうことが窺い知れる。

重苦しい気配に、サスケはうまく息が出来ない気分になった。

（コイツは一体幾つの顔を持っているんだろうか）

「これは、『我ら』の総意でございます」

イルカが迷いのない眼で答えた。

「そうか：ありがとう。仕えることを許す。その腕、我が下で存分に振るうが良い」

ナルトがそう言うと、イルカはまた深々と頭を下げる。

「ありがとうございます」

何かの始まる音がした。

第十話：最初の一步（後書き）

ちよつとぐだぐだかも知れませんが、書きたい部分だったので、御視聴ありがとうございます。

番外編その3…ひゅうがけく上>

ヒナタの様子が可笑しい。

そう最初に気付いたのは、妹のハナビだった。

「お姉ちゃん、なんか綺麗になったね」

「む？」

新聞を読む眼を上げて、父・日向ヒアシは居間のテーブルに顎を預けてテレビを見る末の娘を見、次いで廊下を通り掛かる上の娘を見た。

何処が変わったとは言えないが、何となく髪や爪のツヤ、ふとした仕種に漂う雰囲気が違う気がする。

（大きくなったな：母さんに似てきたようだ）

しみじみと時の流れを感じる。

忍びとしての才能はハナビ程ではないが、おっとりした娘らしい性格は良い嫁になる要素だろう。

血継限界として血を継ぐことも大切な仕事だ、いずれは相応の男に：いやいや、まだあの娘には早い。

せめて自分を越える男でなければ認めない、とヒアシの思考はズレ続ける。

故に一瞬反応が遅れた。

「これが恋の力ってやつなのかもね」
ぐしゃり、新聞が歪んだ。

「恋：だと!？」

「お父さん知らないの？お姉ちゃんの学年じゃ、有名なしいよ。お姉ちゃんが貧血で倒れた時、お姫様抱っこで保健室連れてってくれたんだってー」

「：誰なんだそいつは：」

やたら低い、地を這うような声が出た気がする。

「うずしお？うずまき？そんな感じの名前の人。最近急に綺麗にな

ったから、何か進展があったのかもね」

ちよっと懂れるなあ〜と呟くハナビはともかく、ヒアシはガーンガ
ーンと頭の中で鐘を打たれるようなショックに苛まれていた。

うずまき…それは遠い日のトラウマを呼び起こす名だ。

「赤い、血潮のハバネロ…っ！」

「何それ」

NARUTO〜真田紅虎伝〜 番外編その3…ひゅうがけく上>

父と妹のそんな会話を知るよしもなく、ヒナタは自室で二枚の紙切
れを見詰めていた。

一枚は最近オープンしたスイーツバイキングのタダ券、もう一枚は
今人気の映画『風雲姫』シリーズの最新作のチケットだ。

どちらもつい昨日ナルトから贈られたものだ。

『ヒナタ殿！』

『あっ、ナルト君…』

『先日は誠に助かり申した。ヒナタ殿は甘味は好きか？』

『え？あ、うん。結構好きだよ』

『ではこれを』

『…スイーツバイキング？』

『はい、先々月西区にオープンした店のものでござる。某も贖し
ておりましてな、抹茶ロールが格別なのです。今度の日曜日に共に
参りませぬか』

『えっ』

『先日の礼を兼ねておりますので、どうぞご遠慮なく』

『で、でも！御礼してもらう程の事じゃ…』

『ただ某の気が済まぬのです。それとこちらも』

『あ、あう…』

『日曜の9時、映画館前にてお待ちしております』

（つまりこれって、デートってことだね）

かーっと頬に血が上る。

（どどど、どうしよう…前みたいに倒れちゃったら…ていうか、何着て行こう！？）

まだ木曜日だが優柔不断な自分の事、早め早めに決めておかなければまた迷う。

カレンダーに赤ペンで印を付けて、ヒナタはおもむろに衣装箆筒をひっくり返しはじめた。

ある日曜日の早朝5時、ネジは日向宗家当主にして伯父であるヒアシに呼び出されていた。

職権乱用で無理矢理班の予定を組み替えてまで、丸一日空けさせられた。

（一体何があるというんだ…）

「ヒアシ様、ネジです」

「入れ」

通されたヒアシの書斎には、早朝を差し引いてもどんよりとした暗い雰囲気漂っていた。

文机に組んだ腕に額を預け、ヒアシはなおも怨念を発している。

ネジの父・ヒザシと同じ顔を苦悶に歪め、心なしか髪にもツヤがな

い。

ネジは無性に帰りたくなった。

「…ネジよ」

「はい」

それでも呼び掛けられれば答えない訳には行かない。

例えばどす黒い怨念を放つていようが、悲しいかな、ネジの立場では従うほかないのだ。

「今日お前を呼んだのは他でもない。ヒナタの件だ」

ヒナタ：ネジにとっては可愛い守るべき従姉妹の片割れだ。

彼女に何かがあると言うのか。

「ヒナタ様に何か？」

尋ねると、ヒアシは瘴気を吐くかと思うほど深い深いため息を吐いた。

「今日ヒナタは：男とデートをする」

「！！」

告げられた言葉は、ネジにとって容易に無視出来ない意味を含んでいた。

ちなみにヒアシは大人げなくも白眼を使ってまで、ヒナタの部屋のカレンダーを確認したらしい。

「相手は誰です！」

思わず声が荒くなる。

「静まれネジ。相手はうずまきナルト、ヒナタの同級生だ。お前は二人のデートを尾行し、うずまきナルトの人間性を調査するのだ。場合によっては邪魔しても構わん」

ネジを窘めつつも怒りが振り返してきたのか、ヒアシはどろどろと地を這う声で当人達には迷惑極まりないことを宣う。

だが相手もさるものだった。

「解りました。全力で試させて貰います」

ネジの決意に答えるように、ヒアシの額にキラリと朝日が反射した。

約束の日曜日、早く起き過ぎたヒナタは時間ではないが待ち合わせ場所に向かっておく事にした。

御礼をしてもらうのだから、とあまり気取り過ぎないよう動き易さを優先し、それでいて小紋柄のスカートやちりめんの髪飾りで女の子らしさを演出してみた。

可愛いが歩きやすいお気に入りのサンダルで映画館前にたどり着く。設置してある時計を見上げれば、約束の時間までまだ15分ほど余裕があった。

そのまま入り口に視線を落とすと…

「ナルト君!？」

「おおヒナタ殿。お早いお着きですな」

既にナルトが立っていた。

にこりと笑うナルトにいつもの赤い鉢巻きはないが、ダークレッドに白のファイアパターンのシャツと磨かれた古銭の首飾りを着けていた。

いつもと違う出で立ちに、どきりと心臓が跳ねる。

「お、おはよう！」

「おはようございます。映画は9時10分からののですが、少し時間があります故中の売店へ寄っても宜しかろうか」

「うん。私もパンフレット欲しいし」

売店に足を踏み入れ、まばらな客に混じって棚を物色する。

やはり風雲姫のロードショー中だけに関連商品がずらりと並んでいた。

（あ、これ可愛い）

ヒナタはこれから見る風雲姫最新作のタイトルロゴを小さく透かし彫りした朶を手にとった。

紅葉と流水模様が綺麗で、普段使いにも良さそうだった。

（どうしよう。買っちゃおうかな）

「そちらをお買いになられるのか？」

掛けられた声に振り向けば、大量のグッズを抱えたナルトがヒナタの手元を覗き込んでいた。

「そ、そんなに買うの？」

ナルトはそんなに熱心な富士風雪絵ファンだったのだろうか。

「某のものではござらん。小サスケが行くなら買い占めてこいと」

「そ、そう…うちは君のなんだ」

「購入なさるなら、共に精算してしましましょうぞ。そろそろ時間が押してござる」

「う、うん」

大量のグッズは宅配に頼むらしい。

特に知りたくもなかった衝撃の事実に啞然としつつも、パンフレットと飲み物を買って受付へと歩を進めた。

番外編その3..ひゅうがけ<上> (後書き)

ナルヒナデート編です。

日向さん家はヒザさんの事さえなければ仲良し家族と信じてます。
御視聴ありがとうございました。

番外編その4…ひゅうがけく中>

赤い血潮のハバネロ：それは四代目火影・波風ミナトの同年代にとって、はつきりと好悪が別れる一人の女性を指す言葉だ。

ヒアシは何故か常に、彼女が暴れる度に流れ弾に当たったり吹っ飛ばされた人間に巻き込まれたり、二次災害の被害を被ってきた。更には同じく巻き込まれたヒザシと共に抗議して、白眼の甲斐なくぶっ飛ばされた事件からすっかり彼女の怒りの波動がトラウマになってしまったのだった。

うずまきクシナ：それが彼女の名である。

平素の彼女は決して悪い人間ではなかった。

ただその堪忍袋の尾が切れた時、必ずヒアシに不幸がさんざめく降り注ぐのだ。

故に出来れば遠ざけておきたい要注意危険人物だった。

既に故人ではあるのだが今だトラウマは根深く、ヒアシの背に冷や汗を垂らす。

ヒナタの入学式の日、その息子が可愛い可愛い娘と同級生になると聞いた時は呼吸に失敗して咳込んでしまった。

ましてや、それが娘の初恋の相手であるという。

娘の意志は尊重したい。

だがヒアシにもどうにもならない恐怖が、酷いジレンマを生み出していた。

どうか箸にも引っ掛からない悪ガキであってほしい、そうでさえあれば幾らでも反対できるのだから。

気もそぞろに道場で門下生を見ていたら、上座に掛けてあった心得の額が外れてヒアシの頭に直撃した。

留め具が脆くなっていたらしい。

慌てたようなヒザシの声を遠くに聞きながら、ヒアシの意識は暗転した。

ヒナタはふわふわと夢見心地だった。

『風雲姫』は笑いあり涙あり、淡いロマンスありと文句なしに面白かったし、手を伸ばせばすぐ触れる距離にナルトがいる。

何よりナルトがずっとヒナタを注視してくれているのが嬉しくてならない。

呼べば答えてくれて、綺麗な青の眼には自分が写っている。

「…の途中、風雲姫が諦めかける仲間達を叱咤する場面は感動的でしたなあ」

「うん、ラストの助けられたお姫様の結婚式も綺麗だったね」

映画の感想を述べ合いながら、ゆっくりと西区へ向かって歩く。

ずっと顔に血が上っている気がする。

人混みを抜けてたどり着いたのは白い西洋風の建物で、立て看板にスィーツバイキング開催中と書かれていた。

大きく取られた窓から覗けば、男女比率2…8といったところか。

親子連れもいるようで、アカデミーのクラスメイトこそいないがちらほらと子供の影もある。

ナルトは慣れた様子でチケットをレジの店員に差し出し、ヒナタを促した。

「さ、ヒナタ殿も。いざ参りましょうぞ」

甘い香りが鼻をくすぐり、店内には様々な菓子とパスタやサラダなどの料理が所狭しと並んでいる。

指定された席に早速色々と並べて、二人舌鼓を打った。

ナルトオススメという抹茶ロールは、緑のスポンジに抹茶クリーム、上白糖をまぶし更に抹茶を散らすという念の入れようで、そのくせ口に含めば抹茶が濃すぎるということもない。

「…美味しい！」

「でしよう！濃厚な抹茶に上品な甘さが格別で。ロールケーキなら木の葉でも一番かと」

自分が褒められたかのように嬉しそうにナルトが笑う。
とそこへ近づく人影があった。

「ナルちゃんじゃん」

「！アンコねえ！」

アンコと呼ばれたその女性は、藍色の髪と抜群のスタイルを持つきつめの美人だった。

（かっこよくて綺麗な人…）

女のヒナタから見ても十分に魅力的な女性であった。

「アンコの知り合い？」

ひょこりと覗き込んできたのはこれまたずっと一本筋の通った意志の強さを垣間見せる美人だ。

「うん、甘味仲間のナルちゃん。ナルちゃん、こっちはあたしの先輩の卯月夕顔さん」

「お初にお目にかかります。某、うずまきナルトと申す」

ナルトは丁寧に向き直って頭を下げた。

「はじめまして」

卯月という女性もにっこりと微笑んで会釈する。

「で、ナルちゃん。そっちのかわいいこちゃんは？」

「こちらは某の同級生で日向ヒナタ殿。ヒナタ殿、こちらは某が幼少の頃より世話になっているみたらしアンコ殿でござる」

「は、はじめまして…」

「日向の子なんだ。ナルちゃんの彼女？」

頭を下げると、アンコは興味津々といった様子でヒナタの眼を覗き

込んだ。

日向家特有の銀の瞳を見たかったらしい。

「アンコねえの破廉恥。某と仲を勘繰られるなどヒナタ殿に失礼でござる。此度の事は試験勉強にお付き合い頂いた御礼でござるよ」ナルトはぷりぷりと膨れっ面でアンコを見上げ、それを見たヒナタは少しだけ残念な気分になった。

何もないのは解っているが、何かあれば良いのに、と。

「ヒナタちゃんヒナタちゃん」

「は、はい？」

アンコのいたずらっぽい表情に腰が引ける。

「ナルちゃんって変なところ鈍いけど、絶対いい男になるからちゃんと捕まえとかなきゃダメよ？」

「！」

耳元で囁かれた内容に目を見張る。

至近距離で見詰め返せば、優しい光を帯びた目とぶつかる。

「お姉さんは応援してるからね」

「…ありがとうございます」

認められた気がして嬉しかった。

アンコはひよいと身体を離すとひらひらと手を振った。

「それじゃ、お邪魔にならないうちに行くわ。またね！」

「はい、また！」

にこやかに手を振るナルトの向かいで、ヒナタも小さく手を振った。

（初っ端から15分前行動…くっ、やるではないかうずまきナルト）
報告用のメモを書き留めつつ、ネジは内心舌打ちした。

さりげなくヒナタの右隣りをキープして壁側を歩かせているのも好印象だし、映画館中の売店でヒナタの分まで支払っている点も評価

していい。

（貴様がヒナタ様に相応しい男かどうか、確かめさせてもらうぞ：！）

決意も新たに薄暗いシアター内でも目立つ背後の金髪頭を白眼で睨め付ける。

折角の風雲姫も、ネジの頭にはキレイさっぱり入りもしなかった。

映画が終わり、二人は映画の感想を語り合いながらゆっくりと西区へ向かって歩き始める。

たどり着いた先は女性客の多い華やかな印象の白い建物だった。

（今人気のスイーツビュッフェ：！甘いもの以外も充実していると噂の店舗じゃないか。何処まで乙女心をくすぐるか：！）

さすがに例え変化しようとも一人では入りづらいため、またしても白眼に頼らざるを得ない。

見た目からして甘ったるい菓子類に、手元の握り飯さえ甘い気がする。

と、そこにナルトに話し掛ける女性客が二人いた。

知り合いであるらしく親しく言葉を交わしているが、その傍らでもじもじしているヒナタには気付いていないらしい。

（おのれうずまきナルト！ヒナタ様を不安がらせるとは何事だ！）

人気のない路地裏とは言え、壁に向かって一人握り飯を握り潰しながら齒軋りしているネジの姿は、異様の一言に尽きた。

見付かれれば確実に通報されるレベルだが、今は気圧された猫がそそくさと逃げ出すばかりだ。

だがそのネジの肩を叩く勇敢な人物がいた。

「誰だ！？」

（不覚：！）

脳への負担を減らすため：といえは聞こえは良いが、所詮人間は自分の見たいものと見たくないものしか見ないもの：ヒナタとナルトにばかり集中して自身の周囲の警戒を疎かにしていた。

振り返ったそこにはつい先程ナルトに話し掛けていた藍色の髪の女

と連れの女の二人が立っていた。

「君ね？無粋にもナルちゃんとヒナタちゃんのことじろじろ見てたのは？」

ばれている。

見ればしつかり額当てを着けているからには、彼女らは忍びなのだろう。

「なっ、俺は！ヤツがヒナタ様に相応しいか見極めるために……！」
決して法に違反することはしていないが、若干後ろめたいのは変わらない。

「はいはい。『人の恋路を邪魔する奴は、尾獣に踏まれて死んじまえ』ってね。男の嫉妬は見苦しいわよ」

そう言う二人の女は手早くネジを拘束し、首根っこを掴んで引きずりだした。

無関係の人間に手を出す訳にもいかず、あっという間に縛り上げられてしまった。

「なっ！放せ！」

もがいても縄が食い込むばかり。

「このアンコさんの目の黒い内は、可愛いナルちゃんの彼女になるかもしれない子の邪魔はさせないんだからね」

成す術もなく、ネジは路地裏の更なる奥へと引きずり込まれていた。

番外編その4：ひゅうがけ＜中＞（後書き）

ネジさんがログアウトしました。

アンコさんがちよっとおばさん臭くなってしまった。

御視聴ありがとうございました。

番外編その5…ひゅうがけく下>

「…うう…あ…赤…潮…」

「？赤潮？」

兄ヒアシの苦しそうな寝言に、ヒザシは首を傾げた。

今日の兄は朝から変だ。

先週急に息子のネジの予定を借り上げ、今朝も日も昇らぬうちから呼び寄せて何やら密談していたらしい。

日課の鍛練も上の空で、門下生は気付かなかったかもしれないが双子の弟であるヒザシはごまかせない。

そう言えば、姪のヒナタが朝から約束があるとかで出掛けていた。

口ではなんだかんだ厳しいことを言っているが、兄が姪達を溺愛しているのはよく知っている。

それが関係しているのかも知れない。

だが基本放任主義のヒザシはそこまで縛り付けるのはどうかと前々から思っていた。

（放っておけば良いだろうに…）

これが兄弟の上と下の違いなのだろうか。

それはそうとネジもネジだ。

おそらく息子の性格上、殺る気満々で姪の様子を見に行ったに違いない。

親戚仲が良いにこしたことはないが、過ぎれば要らぬ騒動を生むかもしれない。

ヒザシはやれやれとため息を吐き、ヒアシの水囊を取り替えた。

NARUTO〜真田紅虎伝〜 番外編その5…ひゅうがけく下>

「ヒナタ殿。今日はお楽しみ頂けたでござろうか？」

昼食代わりのケーキバイキングを終え、商店街でウインドウショッピングを楽しんだヒナタとナルトは、日向地区公園のベンチに腰掛けていた。

そろそろ日が傾き出しうっすらと緋色が指しはじめた空に、三羽ほどの鳩が飛び立っていく。

「うん、楽しかった。ありがとう、ナルト君」

「こちらこそ。お楽しみ頂けたなら幸いでござる」

そのままにここにことお喋りを楽しんでいると、ふとヒナタは今がチャンスではないかと考えた。

都合のいいことに丁度この公園にはあまり人がいない。

やはり機は今しかない。

「…ナルト君！」

ヒナタは意を決してナルトを見た。

「はい？」

ナルトはくるりと青い瞳を回してヒナタを見詰め返す。

「私、私！ナルト君が好きです！結婚を前提にお付き合いしてください！」

「へ！？」

ナルトは眼を丸くして驚きの表情を浮かべた。

「あっ…」

口を手で押さえる。

（いやああー！！何言ってるの？何言ってるの私！？テンパるにも程があるようっ！！）

気持ちを伝えるだけのつもりが、勢い余ってとんでもないことを口走ってしまった。

顔から火が出そうな程混乱しているヒナタの目の前で、ようやく言葉を噛み砕いて理解したらしいナルトは一気にその肌を赤く染め上げる。

「……!!?!?……!!?!?!」

ぱくぱくと言葉にならないらしく、「破廉恥……」と小さく呟くとへなへなとベンチに崩れ落ちた。

「……ナルト君？」

声を掛けても返事はない。

見える範囲の肌を真っ赤っ赤に染めたまま、ナルトは気を失ってしまっただけらしい。

いつも初な反応を示すナルトには刺激が強すぎたようだ。

「ど、どうしよう……」

あわあわ、挙動不振気味に辺りを見回すヒナタに、救いの手は差し延べられた。

それは橙色の髪の毛の男の形をしていた。

「あれ？旦那じゃん」

左手の買物袋から大根をはみ出させた男は、ぱちくりと目を瞬かせた。

「あ、貴方は？」

そう尋ねると男はひらひらと手を振った。

足音がしないあたり忍びであるらしい。

「俺様は上月佐助。ナルトの旦那の保護者だよ。んーと……あー、こりゃ熱があるな」

ひょいとナルトの額に触れると、上月はヒナタを見た。

「ええと、君が日向さん家のヒナちゃん？」

「は、はい！」

「デート中悪いけど、旦那はこのまま俺様が連れて帰るわ」

上月は申し訳なさそうにそう言うと、ぐったりしたナルトをおんぶの形で背負った。

「でっ……!!?!?はい、お願いします」

ヒナタは動揺して変な声を出してしまっただが自分ではどうしようもなかったのも事実、おとなしく上月に任せることにした。

「ごめんね。旦那も今日の事凄く楽しみにしてたんだよ。これから仲良くしてやってね？」

上月の言葉に、ヒナタは喜びに鼓動が速くなるのを感じた。

「はい。私も、もっとナルト君と仲良くなりたいです」

素直にそう答えたが、上月は何故かにんまりと実に楽しそうな笑顔を浮かべた。

「へーえ、ありがとう。よし、ついでに良いことを教えてあげよう」
♪

「へ？」

眼を細めると驚くほど狐に似た雰囲気醸し出す上月に、ヒナタは何となく身構えた。

「昔旦那にお嫁さんに貰うならどんな人がいい？って聞いたことがあるんだ。旦那は『け、健康で気立ての良い武芸に長けた方を迎えられれば理想でござるが…破廉恥！』ってさ！」

ナルトそっくりの声で囁かれた内容に、先程まで話していたことがシンクロしてヒナタの脳内に反響する。

「えっ…ええええ！？」

頭が爆発するかと思うほど勢いよく血が上るが、以前のように気絶するなどという醜態は晒せない。

気合いでなんとか意識を保つ。

それを見た上月はまた笑みを深めた。

「それじゃ俺様はこれで。是非旦那に相応しいいい女になってね」
ヒナタを引っ掻き回すだけ引っ掻き回した上月は、そう言うとしたこらさっさと去って行ったのだった。

ある日曜の夕方、いつも通りハナビが道場で型を取っていると、『ずばんっ』と大きな音を起てて道場の戸が開かれた。

驚いて振り向くと、そこには肩で息をする姉・ヒナタが立っていた。胴着を着ているので鍛練するつもりらしい。

（お姉ちゃんが自分から道場に来るなんて珍しい…）

「どうしました？ヒナタ様」

叔父のヒザシが近寄っているのを横目に見ながら様子を伺うと、ヒナタはいつもおどおどしているのが嘘のように強い光を、一族特有の銀の瞳に宿していた。

そのやる気に満ちた眼をしたヒナタに、周囲の門下生達も驚きをもって彼女を見ている。

「ヒザシ叔父様！稽古をお願いします！」

「はあ、解りました。ではこちらへ」

常のヒナタらしからぬ意気込みにヒザシも若干戸惑っているのが見て取れ、その違和感にハナビは二人の組み手を見守ってみることにした。

するとやはりヒナタはすぐ受け身になる普段と違って果敢に相手に打ち掛かって行く。

（お姉ちゃん、ホントにどうしたんだろう？）

今日は約束があると出掛けて行ったが、喧嘩でもしたのだろうか。だがその顔は決して八つ当たり気味の怒りを帯びたものではなく、晴々とした決意を秘めて輝いている。

（あ…また綺麗になった？）

その表情は妹の眼から見てもヒナタをとて魅力的に見せた。

（何か進展があったのかも。いいなあ…恋って、どんなものかしら？）

ヒナタの変化に、ハナビも恋というものに興味を抱きはじめる。

新たな波乱の予感に近い…のかも知れない。

番外編その5..ひゅうがけ<下>(後書き)

デート編終了です。

次から本筋に戻ります。

御視聴ありがとうございました。

第十一話…班分け悲喜薦々

今日はいよいよ運命の班分けの日、ということ、アカデミーの講堂に卒業試験を無事クリアした下忍達がざわざわと興奮気味に集結していた。

イルカは感慨深い思いで班分けを次々と発表する。

「次、第七班！うずまきナルト！うちはサスケ！はるのサクラ！」

うずまきナルト：イルカが海野六郎だった頃に出会った最高の主、真田幸村の生まれ変わりの少年は、記憶を取り戻して改めて見れば確かにかつての主そのままの性格をしていた。

そして元・真田忍隊長であった猿飛佐助もまた、彼の側に生まれ変わっていた。

明かされた真実には複雑なところもあるが、佐助自身それを悔やんでいることに少しだけ救われる思いもある。

今はただ、仕えるべき主に再会出来たことを素直に喜んでおく事にした。

いずれナルトは火影になると言う。

ならば自分はそれを全力で支えるまでだ。

「：以上で班分けを終了する！」

一度眼を閉じて咳ばらいし、喉を調える。

生徒たちを一人一人見回せば、皆キラキラと希望と期待に溢れた眼で見返してくれた。

「これでお前達はアカデミーから卒業だ。一人の忍びとしての自覚をもってそれぞれの任務に励んでほしい。お前達の活躍が聞こえてくる事を期待している！」

そう締めくくると子供達は一斉に席を立ち、声を揃えて。

「「「「ありがとうございます！！！」」」」」

忍びとしての感情制御すべてを掛けて、泣くことだけは堪えた。教師冥利に尽きるとはこの事だろう。

「おう！行ってこい！」

NARUTO（真田紅虎伝） 第十一話…班分け悲喜薦々

「あふ：随分と遅うござるな」

講堂据え付けの机にぐたーと伸びたナルトが欠伸混じりに呟けば。

「そうだな：早く来ればいいのに」

ふわりと貰い欠伸したサスケが答えるが、不思議とその声に焦りはなくまったりと、待たされ続けて苛ついてもいい筈の時間が穏やかに過ぎて行く。

最後の班が出て行って30分程経過した頃は、サスケも苛立ちをあらわにしていた。

だがナルトの『機を待つことも重要だぞ、小サスケ。動かざる事山の如しよ』という言葉にあっさりと焦ることを止めた。

サクラはそんな二人に疎外感を感じていた。

この二人が同じ家に住んでいる事や前々から友達付き合いしていた事は知っていたが、アカデミー内では登下校時くらいしか近くにいたりところを見たことがなかったため、それほど仲の良い印象はなかった。

だが今この様子を見れば、二人が互いを信頼し合っていることが何となくだが解る。

普段から積極的に話し掛けていたつもりだが、明らかにサスケの中で自分の優先順位がナルトより下に位置付けられている事に気付いてしまった。

それが何より悔しい。

（私とナルト、何が違うの？）

普段のナルトは子供っぽく、犬塚や奈良、秋道に混じっていたずらもするし、真面目ではあるがじっとしていると眠ってしまう質らしくよく居眠りしては叱られていた。

サクラはそんなナルトをずっと格下に見てきた。

熱苦しくていつだって馬鹿っぽく笑っているナルトは、クールで何でもこなすサスケに相応しくないと。

（私はずっと、サスケ君に相応しい女の子になるために勉強もオシヤレも、苦手だけど鍛練も頑張ってきたんだから）
自分だけではない、いのだってそうだ。

何度か授業参観等で見かけたが、ナルトは特別上忍の人に引き取られているという。

きつとサスケはついでで預けられただけに決まっている。

うちは一族といえど里でも特別な地位にあり、その最後の一人なのだからそう易々と預けられるものではない。

里親経験があり、友でもあるナルトのいる家が妥当だったただけなのだ。

（…負けないんだから…!）

腹の中にどす黒い思いを抱えたまま、サクラはサスケの向こうで寝息を立て始めたナルトを睨んだ。

「さーて。そろそろ行かないとねえ…」

そう呟いて、左目を木の葉の額当てで隠し、鼻の上まで覆う覆面をした男は慰霊碑に背を向けた。

銀の髪を揺らし、風のようにアカデミーを目指す。

指定された講堂の扉を開けば、がらんと人気のない室内にすやすや

と小さな寝息が響いていた。

「あちゃー…」

窓に近い席でぼかぼかと暖かい陽気に育ち盛り達は耐えきれなかったのだろう、猫の仔が塊になって寝るように、男…はたけカカシに割り当てられた子供達は団子になって眠っていた。

時計を見れば予定より3時間程遅れていたため仕方ないとも言えよう。

（仲のよろしいことで）

真ん中の腕組みして俯いた黒髪の少年の肩にもたれ掛かる桃色の髪の少女に、仰向けに膝に乗り上げた金髪の少年…何処か懐かしい、少年時代の面影を見た気がした。

（九尾の器にうちはの生き残り、学問の天才児か…なかなか濃ゆいメンバーなこと）

だが此処まで近寄っても起きないとは、先が思いやられそうだ。

「ふにゃっ」

「？」

変な声がしたと思えば、金髪の少年が目許を擦りながら起き上がった。

ちよろり、と一つに縛った長い襟足が揺れる。

少しぼんやりとカカシを見上げ、数度瞬きすれば青の瞳を覆っていた眠気は吹き飛んでいた。

「おお…貴殿が某らの上官殿でござるか？」

随分と古風な喋り方に、カカシは少し驚いて眼を見開きつつ頷いた。

「小サスケ、サクラ殿ー。お見えになりましたぞー」

むにゃむにゃとむずがるように残りの二人も眼を覚まし、カカシはぼりぼりと覆面越しに頬を掻いた。

「とりあえずお前らの第一印象は…バカっぽいな！」

ビシィッと、空気に大きな亀裂が入る音がした気がした。

第十一話：班分け悲喜薦々（後書き）

下忍編スタートであります。

御視聴ありがとうございます。

第十二話…サバイバル演習＜上＞

「そんな自己紹介でもしてもらおうかね」

遅れてきた癖にまだ浅かった溝にのみを打ち付けて深めるような事を宣った男は、場所を移動すると開口一番そう言った。

さしものナルトとて初対面の人物にいきなりバカっぽいと言われて平静でいられるほど人間が出来上がっていない。

未熟者であることは認めるが。

とはいえ、隣で明らかにギスギスした敵意を向けているチームメイト達を見て、逆に冷静になってしまったナルトはとりあえずはただけカカシと名乗った男を凝視した。

気怠げに見えて本当の隙は一切ない、かつての部下・真田十勇士並に腕の立つ忍びであることが解る。

（若いのにたいしたものだ）

「んじゃ、金髪のお前から。名前と好きなもの嫌いなもの…将来の夢とかな」

話を振られてはたと我に帰る。

「お、おお。失礼致した。某、名はうずまきナルトと申す。好きなものは甘味、嫌いなものは病気でござる」

敵は自分の手で討ち取れるが、病ばかりはそうもいかない。ナルトは苦い思い出を飲み込み、話を続けた。

「いずれは世界の闇を減らす漢になるために、まずは火影となる事を目標としておりまする」

そう締めくくると、カカシはじつと情動の薄い垂れ気味の眼で見詰めてきた。

見詰め返すとふ、と視線が外される。

「次、黒髪のお前」

「うちはサスケ。好きなものはトマト料理、嫌いなものは特にない。将来の夢は一族の汚名返上と復興、ナルトを火影にすることだ」

話を振られたサスケがきっぱりと言い切った言葉は自然とナルトの頬を緩ませた。

視界の端で拳を握り締めるサクラには気付かないままに。

NARUTO／＼真田紅虎伝／＼ 第十二話…サバイバル演習＜上＞

早朝：サバイバル演習ということで修練場に集まったのは良いものの、時間を過ぎててもそこにあるのは子供達の影ばかりだった。

「またかよ…」

苦々しげにサスケが呟く。

「朝ご飯抜いておけとか言いながら…始まるのが遅いならちゃんと食べて来たら良かった」

サクラもまた空腹を訴える腹を撫でて呟いた。

「うーむ…致し方ない」

何やら難しげな顔で唸ったナルトがいつもの赤いリュックを下ろし、中をごそごとと開け始めた。

取り出したのはタッパーに詰められた串団子で、蓋を開ければふわりと柔らかく甘い香りが漂う。

綺麗な緑色の草団子はその見目だけでも食欲をそそり、サスケもサクラもごくりと喉を鳴らした。

「上官殿が昨日の調子でお出でになられるなら、一本ずつ位ならば大丈夫でござろう」

そう言って差し出してくるナルトに、ナルトの団子狂いを知っているだけに心配になったサスケが問い掛ける。

「良いのか？」

ナルトは実に悲しげに団子を見詰め、迷いを振り切るようにさらに突き出した。

「断腸の思いだが：動けなければ是非も無し。班分けされた以上我らは一つのちいむだ。仲間と助け合うのは当然の事。忍びの世界は偽り裏切り切り捨て御免だが、それだけでは続けられぬものと佐助も言うておった」

ナルトの言にサクラが眼を丸くした。

「え、サスケ君が？」

そうなるのも仕方あるまい。

彼女はもう一人の佐助を知らないのだから。

「オレじゃない。保護者の上月佐助さんだ。色々忍びについて教えてくれる」

「いかにも。ささ、サクラ殿も小サスケも頂かれよ。腹が減っては戦は出来ませぬ故」

サクラの誤解を正すサスケに同意して、ナルトは改めて二人に団子を差し出した。

「ああ、助かる」

「じゃあ：いただきます」

今度こそ二人は躊躇うことなく手を伸ばした。

口に含めば鼻をすつと抜けるよもぎの香りは、噛めば噛むほど濃厚なものになる。

やはり上月の作る団子は美味いと内心頷いていると、五つ刺しのすでに三つ目まで食べたナルトが声を上げた。

「時にお二方。ものは相談なのですが：」

「それにお前くらいの実力じゃ、殺す気で来ないと取れないよ」

演習内容を説明し、鈴を見せ付けたカカシがそう言うのと、子供達三人はむっと苛立ちを隠せない様子で睨み付けてくる。

「ほう…なかなか言うて下さるものでござるなあ。のう、小サスケ？」

「ああ、ならせいぜい胸をお借りするのでしょうか。はるの、お前にも手伝ってもらうぞ」

「喜んで。鈴の分配は後でゆっくり決めましょう」

怒りに歪んだ笑みを浮かべた子供達…ナルトは朱塗りの派手な槍を、サスケは見慣れない型の甲賀手裏剣を、サクラは起爆札付きのクナイをそれぞれ両手に構えた。

「…あれ？」

カカシは子供達の予想外の反応に首を傾げた。

普通なら此処で怒り狂った下忍達はばらばらに襲い掛かってくるのが常だったのだが、この三人は何故か妙な連携を見せていた。

カカシをぶちのめすというただ一点において。

（仕方ない…攪乱式に引っ掻き回すか）

すっぱりと頭を切り替えて、カカシは懷からイチヤイチャパラダイスを取り出す。

サクラはともかく男子二人はなかなか鋭い殺気を放っているの、完全な見せ掛けの小道具で終わりそうだ。

（さて…どんなものを見せてくれるのかねえ？）

覆面の下で、カカシはにやりと微笑んだ。

第十二話：サバイバル演習＜上＞（後書き）

何だか消化不良…いつか書き直すかも知れません。
御視聴ありがとうございました。

第十三話：サバイバル演習＜下＞

クナイと手裏剣が飛び交う中を、墨絵の獣が駆け抜ける。

この世界に生まれ変わって新たに修得した術は、まるでお伽話に出てくる妖術のように摩訶不思議なもので、自分で使っていても理解不能だ。

だが今は深遠なるチャクラの謎に迫る暇はない。

あちらもまた新たな力を手に入れたかつての同僚・穴山小助であるところの兄・シンが相手なのだから。

『なあサイ』

『何？ 兄さん』

『思ったんだけどさ：オレ達が出会ったのって、偶然だと思うか？』

『突然どうしたのさ？』

『もしこの出会いが必然なら。他の奴らも必然がないとどうして言い切れる？』

『！』

『オレ達の繋がりはあるの方の忍びである誇りだ。ならば我らはまた出会えるかもしれない』

『それは…』

『希望的観測だって解ってる。でも、もしかしたら』

『もしかしたら…』

『いつか、見付かると良いな』

『そうだね』

かつて交わした会話が脳裏を過ぎる。

「サイ！ 『オレ』を殺せ！ 『僕』は先に行く。『地獄の向こう』で

待っているぞ！」

そう叫ぶシンに、サイは躊躇いなくクナイを突き立てた。

「見事だ、サイよ」

根の長・志村ダンゾウがそう言ってサイを褒めた。

「ありがとうございます」

だがサイは知っている。

シンは生きていると。

元より変化の術の達人であったシンはこの世界でその力にさらに磨きをかけ、この世界の幻術と遁行術とんこうじゆつをも身に付けていた。

遁行とは本来、身を隠し難から逃れることを指す。

今やその腕はかつてのサイ自身：前世時点での霧隠才蔵を上回ると知っていたのだから。

（小助よ：しばしさらばだ。必ずやまた相見えよう）

NARUTO／真田紅虎伝／第十三話…サバイバル演習＜下＞

「それじゃ始めな」

カカシの合図にサスケとサクラはそれぞれカカシを囲むように距離を取って飛び道具を放ち、ナルトは槍を構えて真っ正面から飛び掛かってくる。

「うおおおおっ！烈火あ！」

怒涛の連続突きはさしものカカシも多少は気合いを入れて避けねば怪我をしそうであった。

「おっおっおっ？やるねえ」

サクラのクナイが背後から飛び掛かったところにひょいと上空へ避ける。

「あっ!？」

サクラの焦った声が響くが、軌道線上のナルトはそれをカカシのいる上方へと弾きながら槍をくると持ち直し。

「逃がさん! 我が魂! 熱く燃ゆる! 朱雀翔!」

雄叫びと共に槍に炎が灯り、跳び上がったの斬撃そのものは回避に成功したが、火の粉がイチヤイチャパラダイスに燃え移った。

「あゝっ!! イチャパラが!？」

小さな火の粉は一気に燃え広がり、ただの紙でしかない本は燃え尽きて灰になった。

明らかに普通の炎とは質が違う。

（チャクラの属性変化か!？もうこんなにはつきりと発現しているなんて…）

「よそ事に気を取られていては火傷いたしまするぞ! 千両花火!」

着地ざま、ぐぐっと大地を踏み締めたナルトの膝が踏み込まれ、自身を一本の燃え盛る槍と化した突きが繰り出される。

それを変わり身の術で躲し、ナルトの背後を取るが。

「させねえ!」

入れ代わるように立ち位置を変えたサスケの術が炸裂する。

『火遁・豪火球の術』

うちは一族の得意とする忍術だ。

（へえ…なかなかの連携だ…なっ!？）

バックステップで離れようとしたカカシだったが、狙い澄ましたようなサクラの起爆札付きクナイが地に突き立ち、爆風を巻き起こしてカカシの動きを遮った。

そして迫りくる炎の塊の中から。

「火走いっ!」

ぞくり、背筋が粟立つ程の…これはもはや殺気どころではない、鬼気だ。

「!？」

ひたすらに真っ直ぐなその鬼気はサスケの術さえ巻き込んで、鋼の穂先という物理的脅威としてカカシに襲い掛かる。

なりふりなど構ってられない。

カカシは不様にも倒れ込むように横に避けた。

ちりっ、と炎が糸を焼き切り鈴がカカシの身体から離れる。

それをナルトの籠手に包まれた手が掴み取った。

「討ち取ったりいいーっ!!」

ナルトが高らかに吠える。

「小サスケよ、よくやった! サクラ殿もありがとう存じまする! 起爆札の使い所、まっこと見事でござりました」

何のてらいもなく賞賛を全面に押し出した様子に、サクラも嬉しいような気恥ずかしいような複雑な気分になった。

「べっ、別にあんたに褒められたって嬉しくないんだからねっ!」

何だか顔が熱い気がした。

「…ちょいと聞きたいんだが良いか？」

振り向くと、土を払ったカカシ上忍が先程までの気の抜けたような表情から一変、真剣な眼差しでナルトを見ていた。

ナルトはきよとりと青い目を瞬いてカカシを見上げる。

「何でござりましょうか？」

「ちよっとお前だけこっちね」

そう言うのと、カカシはナルトを連れて少し離れたところへ歩いて行った。

(っしや! サスケ君と二人きり!)

ここぞとばかりにサクラはサスケに話し掛ける。

「…話って何なのかしらね? それにしても流石サスケ君。もう火遁

が使えるのね」

そこはお世辞ではなく凄いと思っていた。

火遁だの水遁だの、属性の付いた術を扱うにはチャクラをその属性に変質させねばならず、それには才能と努力が必要になるのだ。

ナルトも檜から火を噴いていたが、掛け声を上げていた点から忍びの術とは言えない。

派手ではあったが。

「いや…オレの炎なんかまだまだだ。あいつに比べたら…」

そう言って謙遜するサスケは凛々しいが、やはり納得はいかなかった。

(何で…)

「それで上官殿？何事をお聞きになられたいので？」

そう問い掛けてきたナルトはくりくりとでかい眼を回して見上げてくる。

先程までの緊張感はすっかり霧散して、とてもあの鬼気を放った張本人とは思えない。

「お前…お前は、誰？」

もっと上手い聞き方があっただろうに、冷静なつもりでやはりまだ動揺したままのカカシが問い掛けると、ナルトはきょとんと瞬いたあと不意ににっこりと笑顔になった。

「某は某以外の何者でもござらんよ。ただ他人^{ひと}より覚えていることが多いだけにすぎませぬ。貴殿らが某を危ぶんでおられることは百も承知、某も貴殿らが信ずるに値するか見ております。全てをさけ出すにはまだお互い時が足りませぬ故、この話はまたしかるべき時に致しましょう？」

ナルトはぴんと立てた人差し指を口許に当て、含みを持ちつつも邪

気のない笑顔を見せた。

「本当は某は不合格でも構わぬのです。それならそれで、それなりの未来を切り開いてみせる所存。ただ、小サスケの事だけはよろしゅうお頼み申す。あやつの悲願のためには、このような瑣末事に躓いている暇はのうござる故。さあ、二人の元へ戻りましょうぞ。結果をお聞かせ下され」

首筋を猛獣の牙で甘噛みされるような悪寒が走る。

その微笑みの奥に、凜猛さの影を見た気がした。

第十三話：サバイバル演習＜下＞（後書き）

難産でした…

停滞中も御視聴ありがとうございました。

第十四話：いざ、波の国へ

結局あの後、カカシとナルトは連れだって戻ってきたが、サスケにはカカシが妙にぎくしゃくしているように見えた。

本来上忍たるカカシの機微など下忍のサスケに判断し得る筈はないのだが、イタチの件がトラウマになったサスケは人の仮面を看破する力を上月に鍛えて貰っていた。

知るよしもないがナルトが与えた動揺が仮面にひびを入れたことも大きい。

（後で師匠に確認しよう）

心の帳面に書き付けて、改めてカカシの前に集合する。

「ちょーっと予定から外れたけど：中々いい連携だったよ。誰の発案だ？」

その問い掛けにサスケもサクラも自然と視線がナルトを向く。

「成る程ね：やっぱりお前だったか」

納得したようなカカシの声に、サスケは草団子を分け合った時の会話を思い出した。

『お二方はこの試験をどうお考えか？』

『：どうって？』

『何かあるのか？』

『そうでござるな：まず木の葉隠れの里における任務の最小単位は《すりいまんせる》でござる。某らは既に三人、同期らは三十人、これから三人に一人ふるい落とすと二十人で三で割るには一人足りませぬ。アカデミーの次期生から引っ張るには実力が足りず、だからと言って、アカデミーに差し戻されたという方にお会いしたことがありまするか？』

『そういえば：確かにないわね』

『だな』

『されば前期生を連れて来るという訳にもいきませぬ。つまり落とすならば三人まとめて、というのが妥当でござろう』

『…だったら何で、合格率66%で三人に一人落ちるなんて言ったんだ?』

『そこが肝よ。落ちるも受かるも三人一緒、それを敢えてあたかも一人は落ちるかのように説明された。これにより通常ならば他者を蹴落としても自分は合格しようと思えるものではござるまいか』

『つまり私達に連携させないようにした?』

『左様。逆に言えばこれは連携を見る試験と某は考えます。忍びは騙し騙されの世界、されど何よりも己と味方を信じなければこれから先を生き抜くことは難しいかと』

『それも上月さんって人が言ってたの? よっぽど大好きなのね』

『いかにも。某はあやつこそ日ノ本一の忍びと申しております故』

そこまで思い出して意識を戻せば、同じような内容をナルトがカカシに説明していた。

「上官殿は朝飯を抜いてこいとおっしゃられた。腹が減っては戦は出来ぬ。敵の糧食を絶つは戦術の基本でござる。空腹で冷静な判断を取れなくしようと致されたのでござろう?」
ナルトは楽しそうに推理を口にする。

「そこまで見抜かれてたとはね。アカデミーの報告とは大分違うじゃない?」

肩を竦めてカカシは苦笑した。

それに対してナルトは胸を張ってこう言った。

「某、ひとところに長く座っていると寝てしまいます。が、《ペえぱーてすと》で赤点を取った覚えはございませぬぞ」
そうなのだ。

なんだかんだ言ってナルトは満点ではないが赤点でもない平均点を

取り続けていた。

上月曰く、『旦那は元々知将一族の出だし、血統上は最高の忍びの血を受け継いでいらっしゃるからね。頭の回転自体は速いよ。下手に突出することの愚かしさも知ってるし』とのことだったから、おかしい事ではないのかもしれない。

普段の天然ボケた生活を見ている上こんな場面には初めて遭遇したサスケは、こっそり半信半疑だった認識を改めることにしたのだった。

NARUTO／真田紅虎伝／第十四話…いざ、波の国へ

火の国、木の葉隠れの里：五影と呼ばれる大国の忍び頭の一人、火影に率いられたこの里には、日々様々な依頼が舞い込んでくる。

魔獣退治や戦場に赴くSランクから、迷い猫や浮気の証拠を探すEランクまで、その幅は広く種類も多い。

結成後二月経った第七班だったが、いまだEからせいぜいDランクレベルの任務ばかりをこなしていた。

一番危険だった時で畑を荒らす熊を山狩りする頭数に集められた仕事くらいだ。

カカシも子供達にフラストレーションが溜まっていることには薄々気付いていた。

実績を積むことの重要性を理解している思考は一番大人なナルトすら退屈そうな顔を見せはじめ、カカシは決断した。

「そろそろ次の段階に行こうか。Cランクの任務を見てみよう」

そう言うと、子供達は目に見えて喜色を浮かべた。

「「やった！」でござる!」「：っし」

「まあ良いのがなかったらまたDだけどねえ」

意地悪くそう言ってやるとジト目で睨まれたが。

子供達を引き連れ火影邸に隣接する本部棟を訪れると、黒髪と横一文字の向こう傷の中忍が受け付けてくれた。

「あ、イルカ先生こんにちは」

「ちわっす」

「お久しゅうござる」

子供達が口々に挨拶すると、中忍の男性は嬉しそうに破顔した。

「おお、ナルトサスケサクラ。元気そうだな」

ひょいと手を挙げて挨拶を返し、不意にこちらに向き直ると深々と頭を下げた。

「初めまして、はたけ上忍。こいつらの担任だったうみのイルカです。くせのある奴らですが根はいい子達ですので、どうぞよろしくご指導下さい」

イルカと名乗った中忍は人の良さそうな笑顔でそう言った。

「こりゃご丁寧に。及ばずながら大事な部下達ですし、力の限り守らせて貰いますよ」

そう宣言すると、イルカは嬉しそうに笑い、受付忍の接客スマイルに戻った。

「それは良かった。さて今日の御用件は？」

「そろそろCランク任務に挑戦してみようかということになりましたね。こいつらに良さそうなやつはありますかね？」

子供達を知っているならば丁度良いものを選んでくれるだろうとお任せにしてみる。

「なるほど。少々お待ちを：ちよつと急ぎですがこれなんかどうですか。護衛任務なんですが」

差し出された一冊の紙束を受け取り軽く目を通す。

「良いですね。これいただきで」

紙を叩くと、パンツと良い音がした。

下忍第七班：通称カカシ班の初めてのCランク任務は、波の国の橋大工タズナを故郷まで送り届け、橋の完成までその身边を警護するという護衛任務となった。

カカシ班の紅一点、はるのサクラはまだ厚みの少ない胸を弾ませて、集合場所に掛けていった。

「おはようサスケ君！あとナルト」

「おう」

「おはようございまする！絶好の旅立ち日和ですな」

明らかに差別的な挨拶：だがこれが彼女らの日常だ：を交わし、毎度いつまで経ってもやって来ない、今回は依頼人を連れて来るはずの上司を待つ。

いい加減サクラとていちいち怒らずに待つ心構えを持てるようになっていた。

忍術の話や昨日の夕飯、波の国の文化風俗やら雑談に花を咲かせていると、ようやく上司である銀髪の上忍が姿を現した。

「毎度おそようございまする、上官殿。されど依頼人殿を待たせてはおられますまいな？」

それに対してナルトが手を振りながら問い掛けると、カカシはどうだと言わんばかりのしてやったり顔で答えた。

「大丈夫。遅刻を見積もった時間を予め伝えといたから」

「「全然大丈夫じゃない（ねえ）から」」

余りのダメ発言にサスケとハモりつつツツコミを入れる。

その事に内心嬉々としながらも、やはりいつも通りのコントめいたやり取りを交わす。

「ま、細かいことは置いといて、出発するぞ」

「「細かくない」でござる」

「：わし、超不安になってきた」

依頼人のタズナが何か言っているが、七班のメンバーは誰も目を合
わせようとはしなかった。

第十四話：いざ、波の国へ（後書き）

お待たせ致しました。

次はもうちょつと早くなるように頑張ります。

御視聴ありがとうございました。

第十五話…桃地再不斬

「タズナ殿、波の国とはどのようなお国でござるか？」

ナルトが依頼人であり護衛対象のタズナ老に興味津々の体で問い掛ける背中を見ながら、カカシは周囲への警戒を怠らぬよう気を張り直した。

赤いふかふかりュックサックの黒ボタンの瞳がキラリと陽光に反射する。

「そうじゃのう…波の国は小さな島の集合でな。マングローブの林に…」

タズナ老も無下にはせず、丁寧に答えてくれている。

「ねえカカシ先生、波の国には忍びはいないの？」

カカシの一步前を歩いていたサクラが思い出したように問い掛けてきた。

「ああ、たいていの国には大なり小なり隠れ里があるもんだが、波の国にはないな」

その後を継いでタズナ老が続ける。

「悲しいかな、わしらの国は超貧乏でなあ。金の超掛かる隠れ里を維持することは出来んのじゃ。それくらいなら必要に応じてこうして他所の里の忍者を雇う方がまだ安上がりじゃ」

「そういう国が多いのが実際のところだね。普通の国の隠れ里は自国の活動で手一杯だから、他所の依頼も受け付けるのは五影のいる里くらいかな」

タズナ老に続いて各国の状況について話し始めると、サスケも気になるのかちらちらとこちらを見ている。

「火影・水影・風影・雷影・土影を有する…」

授業の延長のような、遠足のような、和やかな雰囲気が漂っていた。

依頼人のタズナとの緊張感も大分解れてきた頃だった。

先頭にナルト、殿にカカシしんがりを置いて、サクラとサスケでタズナを挟んで進む。

ふと会話が途切れた瞬間だった。

サクラの前を進んでいたナルトが急に振り向いて、背後に向かってサクラの顔スレスレにクナイを投げてきた。

「!？」

更にナルトに半瞬遅れてサスケも腰に着けた甲賀手裏剣を放っていた。

慌てて振り向けば、背後のカカシの側に黒い人影が二つ、振りかぶった体勢でカカシに飛び掛からんとしていた。

「「ちいっ!」」

鎖鎌でカカシを拘束し切り裂こうとしていた二人の忍びは、舌打ちして鎌部分でそれぞれに迫る飛び道具を叩き落とした。

その隙にナルトとサスケが飛び掛かる。

「虎炎!」

「はあっ!」

「「んがっ…!？」」

炎を纏うナルトの拳が、鞭のようにしなる佐助の蹴りが、忍び達の側頭部や顎を打ち抜いた。

どんな達人でも脳を直接揺らされれば一堪りもないものだ。

見ればカカシもいつの間に変わり身の術を使ったのか丸太に入れ代わっている。

「タズナ殿、サクラ殿、お二方ともお怪我はござりませぬか？」
ナルトが警戒を緩めぬまま問い掛けてくる。

サスケも意識を刈り取られた忍び達を拘束しながら、辺りの様子を伺っていた。

ふと自分の手を見れば、微かに震えている。

（何にも、出来なかった…）

悔しい気持ちが溢れた。

「カカシ上忍。いい加減出てきてもらいたいんだがな？」

サスケがそう茂みに向かって話し掛けると、つまらなさそうな眼の銀の髪の上忍が現れた。

「やれやれ：こう簡単にはれると俺も自信なくしちゃうよ」

「ふざけんな。さして隠れる気もねえ癖に」

事実、上忍たるカカシが本気で隠ればサスケに捉らえられる訳もなし：お互いの実力差が解っているだけにサスケは苛立ちを抑え切れなかった。

（こんな雑魚共じゃ話にならない：もっと、もっと強く…！）

教科書通りの綺麗な縛り口で拘束した二人組の忍びにも不満感ばかりだ。

目指す先は兄や師の君臨する高みの世界：そこに至るには己の持つ才能ではまだまだまだ時間が掛かる。

「どういうことですかね、タズナさん。我々の受けた任務は橋の建設期間中の護衛とのことですが、忍者が出てくるとなれば話は別だ。登録はCランクでしたがこれはBランクレベルの難易度ですよ」

カカシがタズナ老人に詳しく話を聞きに掛かっているが、サスケは任務を中止する気は毛頭なかった。

タズナ老人とガトーとか言う成金の因縁もどうでもいい。

：ナルトは、義憤に燃え滾っているようだが。

「多数決しようか。任務を続行するか？」

カカシの問いに真っ先に答えたのはナルトだった。

その眼には轟々と燃える火が宿っている。

「某は続行を支持します。義を見てせざるは勇なきなり、民を守るが某の願いなれば」

「オレも続行だ。こいつらより強い敵が出るなら望むところだ」

そう答えるとカカシは深々とため息を吐いた。

残るは第七班の紅一点、サクラのみだ。

「：私も、続行したいです」

やたらと重苦しい気配を纏って、サクラはそう言い切った。

「やれやれ：仕方ありませんね」

こうして任務の続行が決定されたのだった。

タズナ老人の友人の手引きで波の国に入り、しばし進んだ頃の事だ。最初に気付いたのは、そこは上忍の面目躍如、カカシだった。

「全員伏せろ！」

ナルトは咄嗟にタズナを引き倒し、木に突き立った大剣を睨み上げた。

その柄に立っていたのは、短めの黒髪に口元を覆う白いマスク、横一文字に傷を付けられた霧隠れの里の紋を刻んだ額宛て：そして何より、底冷えするような『鬼』の眼を持つ男だった。

「あーらら、霧隠れの里の抜け忍・桃地再不斬君じゃあないの」
カカシが茶化するように男の名を言い当てる。

途端に激流のような殺気が押し寄せ、かつて『紅蓮の鬼』と呼ばれたナルトの中の幸村が反応した。

（何と暗く冷たい：だが、堕ち切っておる訳ではないようだな）

数多の戦場を駆け抜け、幾多の鬼と呼ばれる者達と対峙し、自身もまた鬼と呼ばれたからこそ解る。

目の前の男は笑いながら人が殺せるだろう。

だがその眼は、嘲笑いでもしなければ生き残れなかった者達のそれとよく似ていた。

忍隊を従えたからこそよく見たその眼に、ナルトは一人の忍びを思い出していた。

（よう似ておる…由利鎌に）

第十五話：桃地再不斬（後書き）

結局また遅くなっちゃった…

実にすみません。

御視聴ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7737q/>

NARUTO～真田紅虎伝～

2011年9月16日09時39分発行